朱熹「楚辭集注」攷

小南一郎
京都大學

楚辭に關係する文學作品や書物には、その著述の動機について往々にして〝怨念說〟めいたものが纏るのであるが、朱熹の晩年の仕事である「楚辭集注」についても、宋代にすでに樣々なとりざたがあった。陳振孫「直齋書錄解題」は、「楚辭集注八卷辨證二卷」の項に次のように言う。(1)

侍講、新安の朱熹、字は元晦の撰述。王逸の「楚辭章句」や洪興祖「楚辭補注」の注釋が、或いは迂遠で實際から離れ、或いは性急すぎて道理を害なっている所から、別個に新しい注釋を作ったものである。訓詁を施し文義を說明したほか、まとまって考證訂正を加えるべきものについては、「辨證」にそれを記した。このようにして、それまでの注釋の囚われた見方を除き去って、屈原の深意を千年もの後代に明白にすることができたのである。

忠義の精神は、これによって俄然生き生きしたものとなった。

すなわち朱熹はこの注によってこれまでの注釋では十分に明らかになっていない屈原の本意を發明したのだという。ここまでは「集注」の朱熹自身の序を要約したものである。これに續け、陳振孫はこの書物の製作の時期を述べて言う。

朱熹がこの注を作ったのは、〝慶元退歸〟の時のことである。その序文に「放たれし臣、棄てられし子、怨める妻、去られし婦」と言っているのは、思うに自らの感慨を寄託したものなのである。彼は以前から六經のそれぞれに注釋を加えてきたが、その止めどもなく溢れ出てくる廣闊な見聞は、この書物に集中的に示されている。

〝慶元退歸〟すなわち紹熙五年（一一九四年）十月、侍講として寧宗に「大學」などを講じていた朱熹が、宮廷での地位を奪われ、故郷に退歸してのち、感じ託する所があって「楚辭集注」を著したのだと言うのである。

同じく宋代の書目、晁公武「郡齋讀書志」は、「楚辭集註八卷後語六卷辨證一卷」を說明して次のように言う。(2)

右は朱文公（朱熹）が纂定したもの。……騒の形式の文學は楚の地から興った。朱文公がこの書物に心を傾けるようになったのは楚の地方の長官となって以後のことである。或いは、趙忠定の政變に感ずる所があってこの書物に注釋を書いたのだとも言われる。

ここでは二つの動機を擧げている。一つは朱熹が楚の地方の長官となったこと、すなわち紹熙五年の春から夏にかけて潭州（長沙）の知事であったこと。もう一つは、趙忠定の政變に感ずる所があったことである。趙忠定の政變というのは、「直齋書錄解題」に見えた〝慶元退歸〟と同じ事件を指す。忠定は趙汝愚の諡號。趙汝愚は、紹熙五年、病弱な光宗に內禪をさせ、寧宗を位につけた。朱熹を中央に呼び侍講の官につけたのも彼である。趙汝愚は、寧宗即位に際して、皇太后と血緣關係にある韓侂胄を利用し、皇太后の同意を取りつけて事を運んだ。內禪に成功したあと、朱熹は、韓侂胄の勢力が大きくなるのを懸念し、韓侂胄に厚い恩賞を與えると共に政治にはあずからせぬように、と趙汝愚に進言した。韓侂胄を制し易しと考えていた趙汝愚は、その意見を用いることができなかった。間もなく韓侂胄の意に逆ったため朱熹が中央を追われ、趙汝愚も罪を被せられ永州に配流される途上、韓侂胄の意を受けた者に殺された。(3) 慶元二年（一一九六年）正月のことである。權力を握った韓侂胄は、朱熹一派の道學に「僞學」の名を被せ、嚴しい彈壓を加えた。同じ年、沈繼祖が朱熹の十罪を宮廷で告發し、また選人の余嘉至が上書して朱熹を斬るべきことを述べたのもこの頃である。弟子たちも多くちりぢりになり、例えば朱熹から老友として遇されていた蔡元定（季通）も、朱熹をたすけて〝妖〟をなしたということで、慶元三年に道州に貶せられ、翌年配流地の春陵で卒している。

朱熹はこうした彈壓の下に生命の危險まで感じながらその晩年を生きた。すなわち「郡齋讀書志」は「楚辭集注」編纂の動機を、或いは曰くとして、この韓侂胄による政變に求めているのである。

王應麟「困學紀聞」も同樣のことを言う。(4)

南唐（趙汝談）の「趙忠定公（汝愚）を挽す」と題する詩に言う、「空しく考亭の老（朱熹）をして、白きに

垂として離騷に注せしむ」と。楊楫は「楚辭集注」の跋文の中で次のように言う、「慶元乙卯（元年）、黨人を治すること方に急に、趙公は謫せられて道に死す。先生時を憂うるの意、屢々色に形る。一日　學者に示すに釋する所の楚辭一篇を以ってす」と。

ここに「集注」に跋を書いたという楊楫のことは、「宋元學案」巻六九に晦翁の門人として見え、また田中謙二教授が「朱門弟子師事年攷」（以下「弟子攷」と簡稱）二〇〇頁に彼についての資料を集めておられる。[5] 楊楫の跋文は宋嘉定四年（一二一一）同安郡齋刊大字本「楚辭辯證」に付せられて現在に殘るが、[6] いまそのテキストを直接見る便を得ないので、阿部隆一『中國訪書志』の引用によって次に譯出してみよう。[7]

慶元乙卯のとし、私は長溪から考亭精舍におもむき先生に侍することになった。その當時、朝廷は嚴しく〝黨人〟の詮議を行なっており、丞相の趙公（汝愚）も配流の途上で亡くなられた。先生の時世を憂えられるお氣持ちは、しばしばお顔色にまで表われるのであった。思いがけなくもある日、先生が注釋を加えられた楚辭一篇を弟子たちに示された。御前を下ったあと竊かに思いめぐらすに、先生が平生學生たちに教えられるのは、まず第一に大學・論語・孟子・中庸の四書であり、つづいて六經、更についで史書である。秦漢以後の文學作品については、ただ議論のあい間に言及されるにすぎない。ところがここでわざわざ楚辭に解釋を施された。どういうことなのであろうか、と。しかし先生はなにも言われず、我々もお尋ねすることはしなかった。

このほか「四庫提要」巻一四八が引くように周密の「齊東野語」巻三紹熙內禪の條も、「楚辭」注釋の作成の原因は趙汝愚の貶死にあったとしている。

このように宋人の多くが朱熹の「楚辭集注」編纂の動機を、彼が楚の地の地方官であったことや、韓侂胄の變によって事實上官職を奪われ、加えて嚴しい彈壓を受けたことに求めている。前者の朱熹が潭州を治めたことと結びつける說は、例えばその期間中に「修三閭忠潔侯廟奉安祝文」（文集巻八六）の文を殘していることからも知られるように、

彼が屈原の廟を修復して尊敬の念を表わしたという事實がその一つの論據となっているのであろう。そうして特に後者の說は、道學者の朱熹がその倫理體系には必ずしもなじまないであろう「楚辭」の文學に興味を持ったことに對する一つのわかりやすい說明である。ただ兩說とも因果關係がわかりやすいだけに、そう簡單に說明がつくものかどうかに危懼を生じないわけではない。この論文は朱熹の「楚辭集注」編纂の動機について、もう少し廣い視野から檢討を加え、晩年の朱熹にとって「楚辭」の文學が何であったのかを考えてみようとするものである。(8)

注

(1) 「直齋書錄解題」卷十五、楚辭集註八卷辨證二卷。
侍講新安朱熹元晦撰。以王氏洪氏注、或迂滯而遠於事情、或迫切而害於義理、遂別爲之注。其訓詁文義之外、有當攷訂者、則見於辨證。所以祛前注之蔽陋而發明屈子微意於千載之下、忠魂義魄頗有生氣。……公爲此注、在慶元退歸之時。序文所謂放臣棄子怨妻去婦、蓋有感而託者也。其生平於六經、皆有訓傳、而其殫見洽聞、發露不盡者、萃見於此書。

(2) 「昭德先生郡齋讀書志」卷五下、楚辭集註八卷後語六卷辨證一卷（四部叢刊二編本）
右朱文公所定也……騷自楚興、公之加意此書、則作牧于楚之後也。或曰、有感於趙忠定之變而然。

(3) 光宗內禪から韓侂胄專政までの事情については、衣川强「朱子小傳」上、中、下（神戶商科大學人文論集十五-一～四、一九七九～八〇年）を參照。

(4) 「困學紀聞」卷十八
南塘挽趙忠定云、空令考亭老、垂白注離騷。楊楫跋楚辭集注云、慶元乙卯、治黨人方急。趙公謫死于道。先生憂時之意、屢形于色。一日示學者以所釋楚辭一篇。

(5) 田中謙二「朱門弟子師事年攷」同「續」（東方學報京都四四・四八、一九七三・七五年）

(6) 饒宗頤『楚辭書錄』（一九五六年　香港）七頁。また阿部隆一『中國訪書志』（汲古書院　一九七六年）國立中央圖書館藏宋金元版解題一七一頁。

(7) 楊楫楚辭辯證跋
慶元乙卯、楫自長溪往侍先生于考亭之精舍。時朝廷治黨人方急、丞相趙公謫死于道。先生憂時之意、屢形於色。忽一日出示學者以所釋楚辭一編。楫退而思之、先生平居教學者、首以大學語孟中庸四書、次而六經、又次而史傳。至於秦漢以後詞章、時（特）餘論及之耳。乃獨爲楚辭解釋、其義何也。然先生終不言、楫輩亦不敢竊有請焉。
なお楊楫の跋文は「朱子實紀」にも引用があり、ほぼ同文

である。

(8)　この論文は、主として朱熹個人の文學觀の變遷を中心に置いて「楚辭集注」制作の動機を考えようとするものであるが、より廣く文學批評史の流れの中でそれを考えようとしたものに、林田愼之助「朱熹楚辭集注制作の動機――歷代楚辭評價の流れにたって」（九州中國學會報九　一九六三年）がある。また山根三芳「楚辭集註に見える思想」（廣島大學文學部紀要二七－一　一九六七年）も參照。

一　「楚辭集注」編纂の時期

李果齋（方子）に出る「朱子年譜」（李古沖本と洪去蕪本）は、「楚辭集注」の完成を慶元元年（一一九五年）、朱熹六十六歲の年に置いている。これは前に引用した楊楫の「楚辭辯證」跋文によった推定なのであろう。しかし、たとえこの楊楫の跋文の記事に誤りがないにしても、これだけからでは、慶元初年に朱熹が楚辭の注釋を一部完成していたことが知られるだけで、ここで考えようとする「集注」全書の完成がいつであったかは定められない。

王懋竑の「朱子年譜」は、「集注」の完成を慶元五年に繫ける。その理由を、彼は「朱子年譜考異」において次のように說明する。すなわち、「朱子文集」卷四四の方伯謨（士繇）に與えた手紙に、「韓文考異」（韓愈の文集の校定）がほぼ完成したことを告げると共に「楚辭」數卷を抄したことを述べている。このことは「楚辭集注」が「韓文考異」より遲れて完成したことを示す。また「文集」卷七六でも、「集注」の序は「考異」の序よりも後に置かれて、その序文が書かれたのが遲れることを示す。「韓文考異」は慶元三年あるいは四年に完成したと考えられる。また「楚辭辯證」には慶元五年三月の序が付されている。「集注」と「辯證」とは同時期の作であろう。こうしたことから「楚辭集注」の完成を慶元五年（一一九九年）、朱熹七十歲、その死の一年前に置く、というのである。

王懋竑も言うように、朱熹が方伯謨に與えた書簡の中にいく度も「韓文考異」の編纂に關する言及があってその成書の過程を具體的に窺うことができるのであるが、その「考異」がほぼ完成に近づいた頃、書簡の中に「楚辭」の名がでてくる。文集卷四四、第二三の手紙(1)。

先日はおたよりをいただいて嬉しく存じました。ただ

元興や子供たちの申す所では、あなたは憔悴しておられるようであったとのこと。どうしたことでしょう。……ご子息が歸られたとのこと、「韓文外集」の考異を持って歸られましたでしょうか。ついでのおり、なるべく早くおとどけ下されば幸甚です。「正集」は淨書しおわっておりますから、さらにその補足をして、もう一度お送りして檢討していただきます。莊仲はなかなか詳細に校勘を加えております。近ごろは、また「楚辭」も讀んで、數卷を抄寫しました。世に行なわれている書物にはおしなべてみな誤りがあります。嘆かわしいことです。

このように、「韓文考異」が完成に近づいたころ、朱熹は「楚辭」の校勘を始めたようである。なお「文集」で右の手紙の一つ前に位置する書簡の中でも、方伯謨に對し洪興祖の「楚辭補注」の引く説について意見を求めている。田中教授「弟子攷」一八三頁は、方伯謨が朱熹のもとを離れて歸鄉したのを慶元三年ごろと推定される。從ってこれらの書簡はそれ以後に往復されたものと考えてよいであろう。

前引の手紙の中でも朱熹は方伯謨の健康を心配していたが、伯謨は朱熹に先だち、慶元五年（一一九九年）に死ぬ。朱熹は彼の死に際し、特にその詩才を惜んだ。例えば、鞏仲至（豐）に答えた第七の手紙（文集卷六四）では、先に詩才のある者として鞏豐に紹介した黃子厚が死に、今また方伯謨がその才能を十分に伸ばさぬままに死んだと告げている。現行の「朱子文集」の配列を信ずれば、それから朱熹の死までの一年ほどの間に、更に十數通の鞏豐あての手紙が書かれた。その中の第十四、第十七、第十八、第十九の書簡に「楚辭」への言及がある。

第十四の手紙には次のように言う。(2)

福州には以前「楚辭」の白本（正文だけのテキスト）がありましたが、その版木はいまもありますでしょうか。字體も板式もなかなか立派でしたが、年月もたちましたから、或いは磨滅してしまったかも知れません。ただその校定はあまり完全ではありませんでしたので、しかるべく手配して、その古いテキストを底本に、もう一度校定を加えて重刻し、好事の者への贈りものとしていただ

けないでしょうか。それが可能であれば、いそぎお知らせ下さい。

第十七の手紙では、この「楚辭白本」に校定を加えたものの「淨本」を送ってくれれば、自分もそれに「參訂改定商量」を行なうと言い、續けて(3)、

近ごろ古田の一士人（蔣全甫）の著した「〔楚辭〕補音」一卷を手に入れました。なかなかの力作です。のちほど「楚辭正文の校定に」あわせてお送りします。

という。更に第十八の手紙では、「楚辭白文」の重校は、でき上った所から見せてほしいこと、古田の「補音」は一本が蘇君（蘇宜父？）の所にあるから、そちらで筆寫させてほしいと述べ、加えて次のように言う(4)。

私のほうでも「〔楚辭〕音考」一卷を編んだことがあります。「音」と言うのは、古今の正音と叶韻とを纏めて一つにしたこと、「考」と言うのは、諸本の異同を校定して本文中に幷記したことを言います。ただ〔現在の私の考えでは〕これらを別に一卷として纏め書物の後に附錄とするようにしたいと思います。本文の下に割りこませて、讀者の眼を煩わせたり、吟詠の妨げにしたりすることもありますまい。ただまだあまり精密ではありませんので、正文に異同がある場合、穩當なものを一つだけ選んで定本とするのがよいでしょう。また古田の「補音」をまるごと附錄とするのもよいでしょう。

ここで朱熹が自ら編んだと言っている「楚辭音考」一卷のことについては、他にそれに言及する記錄がない。第二十の手紙。璧仲至あての最後の手紙である(5)。

「楚辭」についてはお目にかかった上で論じましょう。元本は字も小さくないのですから、小竹紙にざっと一本を印刷し、お持ちになって見せて下さい。當地の刻工は剪貼（きりはり）に巧みですから、それの上に訂正を加えれば、そのまま版下として印刷することができます。もう一度改めて書くことで誤脫を生ずることもなく、手間も省けます。蘇君のところで書き寫した「補音」が、もしお手もとに屆いておれば、一緒にお持ち下さい。こちらにあるテキストは不完全なもので、それを用いれば闕略の個所が出て、不滿を殘すでしょう。

鞏仲至への書簡の第十七、第十九、第二十の三通の中で「聚星圖」のことが話題となっている。朱熹が「聚星亭畫屏贊」（文集巻八五）を書いたのは彼の死の年、慶元六年（一二〇〇年）正月のことであるから、これらの書簡はいずれも彼の死にさき立つ數ヶ月以内のものと推定されるであろう。

鞏豐に對して構想を述べた考異と音注とが最後に纏められた「楚辭」のテキストは、現行の「楚辭集注」とは別のものである。恐らく「集注」が一應完成したあとも、更にテキストを完全なものとするために、新たな形の「楚辭」の出版をめざしていたものであろう。鞏豐あての最後の書簡は「もうすぐお目にかかれることを、今から樂しみにしております」と結ばれるが、けっきょく朱熹は鞏豐に會って新しい「楚辭」のテキストの完成のための指示を與えられぬまま死んだのであろうか。

慶元三年の冬か四年の初春に作られたと考えられる朱熹の詩「戲れに楊庭秀の離騷の句を問訊するに答う」（文集巻九）には次のようにある。

朱熹「楚辭集注」攷（小南）

春到寒汀百草生　春　寒汀に到りて　百草生ず
馬蹄香動楚江聲　馬蹄香　動きて　楚江聲あり
不甘强借三峰面　强いて三峰（華山）の面を借りるに甘んぜず（？）
且爲靈均作杜衡　且く靈均（屈原）の爲に杜衡となす

これは、楊庭秀（萬里）が、「離騷」中の「杜衡と芳芷を雜う」の句の香草「杜衡」について自說を述べてきたのに對する答えの詩と推定される。馬蹄香と杜衡とは別種の草だとするのが楊萬里の說であったのであろうか。ちなみに朱熹は「離騷」の集注の中で、洪興祖の說を引き繼いで杜衡と馬蹄香とは同一物だとしている。

このように楊萬里が「離騷」について問訊してきたというのも、朱熹が當時「楚辭」の注釋にたずさわっていることを知ってか、或いは一部でもその成書を見て、自分の意見を述べてきたものと推測される。

楊萬里の文集「誠齋集」の巻三十八に、その配列から見て前引の朱熹の詩より一年以上おくれ、慶元五年のものと見られる「戲れに朱元晦の楚辭解に跋す」と題する詩がある。

注易箋詩解魯論　易に注し　詩に箋し　魯論を解し
一帆徑度浴沂天　一帆もて徑ちに度る　浴沂の天
（？）
無端又被湘纍喚　端（はし）なくもまた湘纍（屈原）に喚ばわれ
去看西川競渡船　去（ゆ）きて看る　西川競渡の船

この詩で楊萬里は、易や詩や論語などの儒家的な書物の注釋に情熱を傾けた朱熹が、今度は楚辭にまで手を延ばしてきたことを、幾分かは諧謔をこめてうたっている。題に言う「楚辭解」が「楚辭集注」のことであるとすれば、これらの詩の贈答からも窺われる兩人の親密な關係から言って、朱熹は注釋が完成すればすぐ楊萬里にそれを贈ったであろうし、楊萬里も久しく時間がたってからその跋を書いたとは考えられぬから、この「楚辭解に跋す」の詩が作られた時からそれほど隔らぬ以前に「楚辭集注」は完成したのだと推定される。

なお付言すれば、楊萬里には「天問天對解」一卷がある。楊萬里の興味の中心は柳宗元の「天對」の方にあるように見えるが、しかし「楚辭」への共通の關心も朱楊兩人を結びつける一つの要素であったのかも知れない。

もう一つ、そこに述べられている情況から見て〝慶元退歸〟以後のものに違いないが、年代を正確には定められない鄭子上（可學）に答えた手紙（文集卷五六）も「楚辭」の校勘に言及する。「楚辭」の注釋にたずさわった際の朱熹の外的な情況のみならず、內部の心情を窺わせるに足る資料である。(6)

病氣のため經書を讀もうとする氣力もなく、閑にまかせて「楚辭」に目を通しております。この書物にも手を入れて正さねばならぬ所が數限りなくあります。ただ忌諱にふれてはと思い、文字にしようとせぬのです。それで思うのですが、古人ははかりしれぬ思いをこめてこの作品を作ったのに、一度作者の手を離れると、もうちゃんと理解のできる者がなくなってしまいます。それを思えば嘆息を禁じえません。あなたが編んでおられる左氏傳についての御著述はいかがですか。もし書寫する人がおれば、急ぎ數段でも書寫させて下されば幸甚です。病

氣のため門を出なくなってもう何ヶ月にもなります。精舎にも草がいっぱいに茂り、その中に一人坐って語り合うべき相手もおりません。たまたま便りを得て手紙を託します。風に臨み、なつかしい氣持ちを抑えかねます。

ここに記されている情況には、いくばくかの朱熹の思い入れが加っているであろうが、その中からも、宮廷から退けられた後の氣落ちした氣持ちの中で朱熹が「楚辭」を讀んだこと、作者の意がこれまでの注釋などでは正確に傳わっていないと痛切に感じたこと、古人の意を正確に知るためにはまず校勘などの整理の仕事が必要だと考えたこと、しかしこの段階ではまだそれを文字にしていなったこと、などを知ることができる。この手紙の內容、特に「〔爲政者たちの〕忌諱をはばかって文字にしようとせぬ」とある言葉から言っても、李・洪の「朱子年譜」が「楚辭集注」の完成を慶元元年に置くのは早すぎるようである。

以上に擧げたいくつかの資料をあわせ考えて、「楚辭集注」の完成を慶元四年～五年に置くのがほぼ妥當な所と考えられる。慶元己未（五年）三月戊辰の日付けを持つ「楚辭辯證」の序文は、王逸・洪興祖の楚辭注の集成を完成したが、本文に卽しての訓詁のほか、楚辭を讀むためにはどうしても知っておかねばならないことがある、それを別に纏めたのがこの「辯證」である、と言う。この「辯證」の完成にさき立ち、しかしそれほど遡らない時期、すなわち慶元四年の後半から五年の初春のころに「集注」は完成したのである。

なお姜亮夫『楚辭書目五種』（一九六一年　上海）は「楚辭集注」の板本の項に宋慶元四年戊午刻本の名を擧げ、「日本大正三年內閣目」にそれが見えるとする。もしこの刻本が存在するとすれば、「集注」は慶元四年には完成していたと考えなければならない。しかし大正三年刊の『內閣文庫圖書第二部漢書目錄』にはそうした版本は見えない。或いは慶安四年（一六五一年）刊行の和刻本「楚辭集注」を見誤まったものであろうか。

ちなみに「楚辭集注」の版本は、最初、「集注」八卷と「辯證」二卷だけが組み合わされて刊行された。前に引い

た「直齋書錄解題」卷十五に見えるテキストがこの段階のものである。その後、これに更に朱熹の孫の朱鑑によって、朱熹が別に晁補之に依りつつ歷代の楚辭の精神を傳えた文學作品を集めて注を付けた「楚辭後語」六卷（息子の朱在が整理出版）が組み合わされて刊行された。その際、「集注」の本文と「後語」とで重複する作品は、その一方が削られた。これが現在普通に行なわれる「集注」「辯證」「後語」が一つになったテキストである。この形のテキストの最も古いものが宋端平二年（一二三五年）刊本で、その一本が現存し、もと山東の海源閣に藏され、現在は北京圖書館に歸した。一九五三年、人民文學出版社により景印本として出版された「楚辭集注」の原本である。(7)

注

(1)　「朱文公文集」卷四四、與方伯謨書

昨辱惠書爲慰。但見元興及小兒皆說伯謨頗覺衰悴、何爲如此。……令子聞已歸、韓文外集考異曾帶得歸否。便中得早寄示、幸幸。正集者已寫了、更得此補足、須更涘去詳定。莊仲爲點勘已頗詳細矣。近又看楚詞、抄得數卷。大抵世間文字無不錯誤、可歎也（以下略）。

(2)　「文集」卷六四、答鞏仲至書

福州舊有楚詞白本、不知印板尙在否。字書板樣甚佳、歲久或漫滅。然讎校亦不至精。不知能爲區處、因其舊本、再校重刻、以貽好事否。如能作此、卽幸報及。

(3)　「文集」卷六四、答鞏仲至書

近得古田一士人所著補音一卷。亦甚有功。異時當併以奉寄也。

(4)　「文集」卷六四、答鞏仲至書

此當編得音考一卷。音謂集古今正音協韻、通而爲一。考謂考諸本同異、并附其間。只欲別爲一卷、附之書後。不必攙入正文之下、礙人眼目、妨人吟諷。但亦未甚詳密、正文有異同、但擇一穩者爲定可也。又可附此古田全書。

(5)　「文集」卷六四、答鞏仲至書

楚詞當俟面議。元本字亦不小、可便以小竹紙草印一本、携以見示。此間匠者工於剪貼。若只就此訂正、將來便可上板。不須再寫、又生一重脫誤、亦省事也。蘇君處所寫補音如已到、幸亦携來。此間所有本子不全、恐將來闕略、却不滿人意也。

(6)　「文集」卷五六、答鄭子上書

病中不敢勞心看經書、閑取楚詞遮眼。亦便有無限合整理處。但恐犯忌、不敢形紙墨耳。因思古人是費多少心思做下此文字、只隔一手、便無人理會得。深可歎息也。所編左氏文字如何。若有人寫、旋寫得數段來、亦幸甚也。病中不敢出門已累月、

精舍亦鞠爲茂草、塊坐無晤語。偶便附此、臨風依然。

なおこの資料は、田中教授の御教示による。

(7) 人民文學出版社景印本楚辭集注に附された鄭振鐸の跋文を參照。

二　朱熹の楚辭觀の變遷

楚辭の文學が激しい感情を表白し、またかたくなに自己主張を行なって、いわゆる〝中庸〟の精神に合わぬ點が多い所から、そうした文學に興味を持って關ってゆこうとする朱熹の姿勢の中に、彼の文學觀の、それも道學者たちの中では特異な一面を見ることができるであろう。しかし「楚辭集注」を通して窺われる朱熹の楚辭觀、より廣くは彼の文學觀は、その生涯の初めから變らず懷かれてきたものではない。前章で檢討したように「楚辭集注」の完成は、朱熹の死の直前のことであった。「集注」に至るまでに、彼の楚辭觀は様々な變遷を示しているのである。

朱熹はいろいろな所で、自分が若い時代に楚辭を好んだこと、しかし道學の探求に專心するようになって、強いてそれを棄て去ったことを述べている。

彼の門人、李果齋の元本「朱子年譜」が、朱熹が二十一歲の紹興二十年春に婺源に墓まいりをした際の插話として記載する次の一事は、彼の若い時代の精神の、楚辭作品への關り方を彷彿させるものである。(1)

當時、董琦が先生に侍して鄉人たちとの會合に參加したことがあった。酒が酣になると、座にいる者たちは順ぐりに歌を唱った。先生だけは離騷經の一章を唱った。その聲は廣々とひろがり、座にある者たちは居づまいを正したのであった。

鄉人たちが歌謠を唱う中で、ひとり離騷の一章を唱う朱熹の姿に、青年らしい颯爽たる孤高への指向を見ることができるであろう。恐らくこの時代、朱熹の精神は楚辭作品とこうした所で共感しあっていたのである。

しかし朱熹自身が若い時代の楚辭作品への精神の傾斜を語るとき、多くはそれが好ましくないことであったという文脈で述べられている。

例えば「朱子語類」卷一〇四に言う。(2)

私も、むかしは何でも學ぼうとしたものだった。禪や道

教や文章、楚辭や詩や兵法まで、その全てを學ぼうとした。他所に行く時には、多數の書物の中から、それぞれの分野について二册づつ携えていった。ある時、ふと思うには、まあ待てよ、自分の身體ひとつで、どうして多くのものを兼ねそなえることができようか、と。

青年らしい、全てを自己の中に取りこまねばやまぬという精神でもって事物に對していた時代、楚辭作品も朱熹の興味を強く引くものの一つであったのである。しかし、恐らく、自己の〝生〟がはっきりと見えるようになり、全てに關ろうとしてもそれは不可能であることを知ったとき、朱熹は自らなすべきこととして〝道學〟を選び、楚辭など、それ以外のものへの興味を強いて切り棄てた。

呂伯恭（祖謙）に與えた書簡では次のように言う。(3)

屈原、宋玉、唐勒、景差らの文章を、私もむかしは好んでおりました。後に思うには、彼らの作品には様々なことが述べられてはいるが、その實質は悲愁と放曠の二つの方向以外には出ぬものなのだ。毎日こうした作品を誦してその感化を受ければ、精神を大いに害うことになるだろう、と。以後はそうした作品を近づけず、二度と讀もうとすることがありませんでした。

この文章は、その前後や關係のある書簡から知られるように、次のようななりゆきの中で述べられたものであった。すなわち、呂祖謙は蘇東坡の作品を好んでいた。朱熹がそれを非難すると、呂祖謙は、蘇東坡の作品は文であって道とは沒交渉なものだと辯解した。それに對し朱熹は文が道を害う例として屈原以下の作家の作品を擧げ、そうした作品に對する自分の嘗つての好尚とそれからの脱却とを述べたのである。

同じ書簡の中で、朱熹は文と道との關係について次のように述べている。(4)

そもそも文と道とは、果して同じものなのだろうか、別のものなのだろうか。もし道を離れて事物が存在しえるとすれば、文を作るものが勝手氣ままにでたらめを述べても、道を害なうことはない。しかしもし道を離れて事物が存在しえぬとすれば、述べる所にいささかでも道に合わぬ所があれば、それは道に對して害あるものとな

る。ただその害に緩と急、深と淺との區別があるだけで〔道を害するという點に違いはない〕。

言うまでもなく、この時の朱熹は、道を離れて事物は存在しえず、したがってほしいままな文學表現は道を害なうものだという立場に立っていた。

朱熹が〝文は道を害なう〟という信條を心中に固く懷いていたことは、「文集」巻二に收められた詩に附された次のような序からも窺われる。(5)

近ごろ多言は道を害うと考えて、絶えて詩を作ることがなかった。

この序は、道學的な要請から詩を作ることもひかえていた朱熹が、それでも詩が作りたくなって作った道學詩に附されたものである。(6)

上に引いたいくつかの例の中で、楚辭などを愛好したのを「舊(むかし)」だとか「嘗(か)つて」だとか言っているが、その「舊」や「嘗」がいつごろの時代を指すのか明確に知ることはできない。たださきの呂祖謙に與えた書簡は、乾道六年(一一七〇年)閏五月、朱熹四十一歲のときのものと知られ、(7)道學樹立の意氣にもえていた時代の、異端への嚴しい態度がそこに表明されている。恐らく四十歲前後の朱熹は、二程以來の道學者流の文學觀を全面的に受け入れ、それ以前の文學に對して寬容であった自分自身を反省し戒めていたのである。

道學に專念していた時期の朱熹の文學批評の基準を窺わせる資料として、「文集」巻七十に收められた「讀唐志」という文章がある。これは歐陽修「新唐書」禮樂志の、政事と禮樂とが別々のものとされているのは正しい狀態ではないという說に依りつつ、それを更に擴げて、より重要なことは道德と文章とが別のものであってはならないということだと主張するものである。

その中で朱熹は、孟軻が沒して聖學が絶えてのちの文章を二つに大別している。すなわち「先にその實ありて後にこれを言に托せるもの(心中に言うべき內實があって、それが文章に表現されたもの)」と「浮華を以って尙となして實の言うべき無きもの(內容がなく文飾だけで作り上げられた作品)」との二つである。前者に「屈平の賦」など

が屬し、後者には宋玉、司馬相如、王褒、揚雄などの作品が屬するとされている。朱熹は、もちろん前者の方をより高く評價するのであるが、しかし「君子は猶お或いはこれ（前者に屬する作品）を恥ずる」。それは、そうした作品の作者たちが內實としているものが必ずしも〝道〟と一致していないからである。

すなわちこの文章から歸納できる、朱熹のこの時期の考え方によれば、〝文〟には次の三つの段階のものがあることになる。

一、心中の〝道〟がそのまま外に表れた〝文〟。この一類のものは道統が絶えた時期には存在しえない。

二、心中に言うべき內實があってそれが文章となって表れた作品。ただその內實が完全には〝道〟と合致していないもの。

三、心中に言うに足る內實もないのに、文飾のみで作り上げられた作品。

そうして極言すれば、第三類の作品のみならず、第二類の作品も〝道〟を害することに變りはないと考えられていたのである。

ここで注意すべきは、朱熹が第二類と第三類の作品よりも上位に〝道〟と乖離することのない〝文〟を置くとき、その〝文〟はすでに文章（文學作品）といった範圍を超えたものであったことである。文中に斯文の傳統に言及するように、文章は〝文〟の一つの表れにすぎず、〝文〟はより廣く文化現象全體の背後にあるものであった。文化傳統の背後にあるものが〝道〟と合致してほしいと望む朱熹の考え方は、むしろ中國の傳統的な觀念で、道學の要請による觀念的な價値づけにすぎないと言ってしまうことはできないであろう。少なくともここの〝文〟をそのまま文學作品と飜譯して考えると、朱熹の思考の中の重要な內容を取りこぼすことになるにちがいない。

更に加えて注意すべきは、こうした文章が道を害うという主張は、單に文學製作者たち、あるいは文學愛好者たちに向けられた戒めにとどまるのではなく、より重要なことはこれが政治的實踐と强く結びついたものであったことである。朱熹が、こうした信條によって自らを戒めるのみな

らず、現實政治の中心に位置する皇帝に對してもそれを強く求めていることからも、この主張の政治的な性格が窺われよう。紹興三十二年、孝宗の卽位のはじめ、天下に〝直言〟を求めたのに對し、朱熹が上った封事、「壬午應詔封事」にいう(8)。

陛下は御德化を養い育てられるはじめに當たり、書籍に親しんではおられますが、それは美文を諷誦し、吟詠にお氣持ちを託されるといったことに過ぎません。加えて老子や釋氏の書物にもいささかお心をお向けになっておられます。〔しかし〕文學作品を暗誦されたとて、それが事物の淵源を探り治道を發見する方途になるのではなく、虛無や寂滅も、ものごとの本末を見通して〝大いなる中正〟を確立する手段となるものではございません。皇帝が文學作品に親しむことは、老子や釋典に親しむのと同樣に、單に何の益もないのみならず、それが當然學ぶべきことを學ぶのに妨げになるとすれば、はなはだ有害なものとなるのである。

しかし、道學に專念していた時期、朱熹は〝文學害道〟の主張を表明しながらも、楚辭への關心や詩の實作などの文學的な營爲を全く棄て去っていたわけではない。

田中教授が「弟子攷」一五一頁に、朱熹の「文學生活は弟子たちと別個のサークルを形成していたらしい」と指摘されるように、「語類」や書簡などの中で朱熹から學問上の指導を受けている弟子たちと、朱熹と共に詩作をしている人々とはあまり重ならない。むしろこの道學グループと文學グループとは、ほとんど朱熹一人で重なるだけで、基本的には別個の集團をなしていたと考えてもよさそうである。そうして道學グループに接する時には、あるいは楚辭などの文學作品はつきつめれば道を害うものと言明したかも知れないが、文學グループと接するとき、朱熹は自らの楚辭への傾倒を隱そうとはしていない。第一章で取り擧げた書簡の相手、方伯謨や鞏仲至らは、方伯謨がすぐれた詩人であったことは朱熹の書簡中にも言及され、鞏仲至も朱熹とは專ら文學を論じている。そうした間柄であればこそ楚辭が共通の話題となりえたのであろう。

また朱熹の作る詩の中でも、道學的な場では否定的にしか提出されない佛教や道家の思想や用語が正面に現れ、それらが一つの作品を構成する骨組みにまでなっている例がある。ここには明らかに道學とは別の一つの世界がある。そうした中で楚辭的な用語も絶えず使用され、「招隱操」など一篇全體が楚辭を下敷きとする作品も作られている。

こうした世界が道學的世界と並存していたことを示すため、朱熹が道學確立のため邁進していた四十歳代の作品と知られるものを擧げてみよう。「文集」卷一に「虞帝廟迎送神樂歌詞」と題する作品がある。その序に言う。(9)

桂林郡虞帝廟迎送神樂歌というのは、新安の朱熹が作ったものである。朱熹(わたし)は太守張栻氏の請いによって新しい廟屋の完成をことほぐ文章を作ったのに加え、更にこの歌を作って桂の地の人々に贈り、これを廟庭に歌いつつ、牲璧を神に獻ずる儀式を行なってもらおうとするのである。

この序は明らかに「九歌」の序を摸倣したものであり、これに續く本文も「九歌」山鬼篇などの句を意識的に利用している。江南の土着の人々の祭祀の歌として「九歌」を作ったとされる屈原に倣って、朱熹も桂人たちに祭祀の歌を作ってやっているのである。

張栻（南軒）のために新しい廟屋の完成をことほいだという文章は、「文集」卷八八に「靜江府虞帝廟碑」の題で收められている。それによって虞帝廟落成のお祭りが淳熙二年（一一七五年）秋七月癸未の日に行なわれたことが知られ、したがって「虞帝廟迎送神樂歌詞」の製作はみぎから遠からぬ時期であろうと推定される。「靜江府虞帝廟碑」はまじめ一方の文章である。しかし「迎送神樂歌詞」の方には、張栻との交遊關係を背景にしたのであろう、親しい感情が込められているように見える。張栻との關係が單に道學上の交渉に限られず、盛んに詩の遣り取りをする間柄であったればこそこうした作品も殘されたのであろう。

朱熹は、弟子たちの前でも、學問の場でないときには「離騷」などの作品を誦していたようである。「語類」卷一〇七。(10)

先生は、一水一石一草一木、いささかでも清陰の場所

を見付けられると、終日じっと見つめられた。酒を飲まれるとき、ほんの二三巡もせぬうちに場所を移し、大いに醉われると、足を組んで坐り、腕組みをされ、經書、史書、諸子の書、文集などのほか、記錄や隨筆の類さえも、みな聲に出して誦された。ほろ醉いの場合は、古文を吟詠されたが、その調子はすがすがしく力強いものであった。私が見聞きした所では、先生がいつも愛誦されたのは、屈原の楚辭、諸葛孔明の「出師表」、陶淵明の「歸去來辭」と詩、それに杜甫の詩數篇に限られていた。

この條の記錄者は吳壽昌。「語錄姓氏」によれば一一八六年（朱熹五十七歲）の師事者。鄉人たちが歌謠を唱う中で、ただ一人、離騷經一章を唱った若き日の朱熹の風姿の餘韻を、この記錄の中から窺うことができるであろう。

このように朱熹がおのれの最も重要な任務と考えたであろう學問の場以外の場所では、楚辭は常に變ることなく愛誦の對象であった。そうしてその愛好は、單に文學作品として高く評價したというに留まらず、屈原の孤高の生き方や孤獨の中でひたすらに訴えかけるという楚辭の表現姿勢への共感を基礎に持つものであったと推定される。

もちろんこの推定は朱熹の心情に關るだけに、確實な資料による裏付けはむつかしいのであるが、例えば朱熹がいくたびかの皇帝への封事の中で述べる主張の基本點と、その主張を行なう際の彼の精神的な姿勢も、楚辭への共感がどのような基盤の上に立っていたのかを知らせてくれるであろう。すなわち、封事の中でいくたびも繰り返えされている主張——主君自身がまず自らを正さねばならぬこと、君側に便嬖の者たちを近づけてはならぬこと、外敵とは安易に妥協してはならぬことなど——は、屈原が主張したとされ、また楚辭作品（特に離騷篇）に見える政治的な主張と同質のものである。そうした主張の訴え方も、絕對的に優勢な現實に對し、孤立無援の中で果敢に抵抗するという姿勢を取っている。實際の狀況がそうであったかどうかは別にして、少なくとも朱熹の、現實世界に對する際の精神的な姿勢の基調がこうしたものであって、その基調において彼は楚辭や屈原と共感しあっていたのである。若い時代の楚辭愛好を通して見た〝颯爽たる孤高への指向〟と同質

のものを、ここにも見ることができるであろう。

もう一つ、平生からの朱熹の楚辭に對する興味をつないでいたのは、楚辭の押韻における叶韻の問題であった。上古音による押韻と當時の字音との齟齬を叶韻（協韻）という考え方で理解しようとする方法は、すでに「詩集傳」で全面的に採用されたが、朱熹はそれ以後も叶韻の體系をより綿密なものにするため努力を續けている。「楚辭協韻」の跋として書かれた「楚辭協韻の後に書す」の文は次のように言う。[11]

以前、私は黃叔度父（黃銖）の編んだ「楚辭協韻」を手に入れてそれが氣に入り、漳州太守の傅景仁に送った。景仁はこれを版木に刻して、府の倉庫に置いていた。ほどなく私が景仁に代って漳州を治めることになった。……そこでその板本（版木になっているテキスト？）にもとづいて訂正を加えた。……紹熙庚戌（元年）十月壬午、新安の朱熹記す。

朱熹が漳州に赴任したのは光宗の紹熙元年（一一九〇年）四月である。「楚辭協韻」の跋文はその年の十月に書かれているが、恐らく文集卷八二の「臨漳に刊する所の四經の後に書す」や「臨漳に刊する所の四子の後に書す」の文に見える四經（書・詩・易・春秋）四子（大學・論語・中庸・孟子）とひとまとめにして刊行されたものであろう。

「語類」卷八〇にも「楚辭協韻」刊行のことが見える。[12]

私には「楚辭叶韻」があるが、子厚（黃銖）の名で、漳州で版にした。

黃銖、字は子厚（一一三一年―一一九九年）は、朱熹の古い同學。その文集「毅城集」五卷がのこるが、「楚辭協韻」は傳わらぬようである。

この「楚辭協韻」は、大はばに「楚辭集注」の中に取り入れられた。「楚辭辯證」上篇に言う。[13]

楚辭の押韻には、今日通用の音では韻をふまぬものが多い。……黃長睿（黃伯思「校正楚辭」十卷）は、韻をふむ個所とふまぬ個所があり、これが楚の歌謠の韻律なのだとしており、彼の音韻に對する考察には粗略な點がある。近ごろ吳棫、字は才老（あざな）が、はじめて協韻の說を深く探り、

「補音」「補韻」を著したが、その論證は根本を突き、はなはだ精密で且つ廣衍である。また私のふるなじみの黄子厚（黄銖）と古田の蔣全甫は、吳棫の遺說を祖述し、それぞれ自らの說を著した。いまそれらをみな注に付記したので、讀者はよく讀んでほしい。

ここに言及されるのと同じものであろう古田の「補音」のよいテキストのことを朱熹が死の直前まで氣にしていたことは、第一章の鞏仲至に與えた手紙（三八頁）ですでに見た所である。

なお宋代に叶韻などの說を出し、當時の音韻體系とは別に古韻の音韻體系が存在したことに氣付きはじめた人々に福建など南方出身の人が多い。それは、南方の音韻が中原のものとは異なり、古い音韻を留める面があったからだとされるが、朱熹もまた南方の方言が「詩」や「楚辭」の押韻に合致する所のあることに氣付いている。「語類」卷八〇[14]。

ある者が問うた、吳氏（才老）の「叶韻」の說はなにを根據にしているのですか、と。先生が言われた、あれには全て根據がある。泉州に吳氏の書があって、一字ごとに多いものでは十數條、少ないものでも二三條の證據が擧げられている。彼によれば、原來はもっと例證が多かったのだが、のちに刪って、ひとまず現在のものだけを殘したのだ、と。しかし不十分な點がないでもない。一例を擧げれば、商頌の「天命降監、下民有嚴、不僭不濫、不敢怠遑」について、吳氏は、嚴の字は恐らくもとは莊の字で、漢人が諱（後漢明帝諱莊）を避けて嚴の字に改めたものだろう、と言う。私は後に「楚辭」の天問篇を讀んで、嚴の字が剛の字や方の字などと押韻していることを見付け、また當地の方言では嚴を戶剛の反に發音している。こうしたことから嚴の字はそのままで皇の字と叶韻の關係にあることを知ったのである。

この條の記錄者は輔廣。田中教授「弟子攷」二一三頁によれば、輔廣の師事期は、紹熙五年（一一九四年）四月までの三ヶ月、慶元三年（一一九七年）十二月前後、同四年六月以前の三次である。「此間の鄉音」と言うのは、恐らく退歸した後に住まった建陽あたりの方言を指すのであろう。

なお「語類」のこの條と同內容の一條が「辯證」下、天問の最後の所にも收められている。

以上述べてきたように、道學的な場では「楚辭」が正面から取り擧げられることがなかったとは言え、朱熹の「楚辭」に對する興味は平生絕えることなく心中にあった。しかし〝慶元退歸〟の後、「楚辭」は朱熹にとって以前とは比較にならない重い意味を持つものとなった。平生愛誦する詞華集以上のものとなったのである。そうした朱熹の「楚辭」への對し方の變化は、彼がそれ以後、從來の「楚辭」の注釋に强い不滿を表明するようになったことに端的にあらわれている。すなわち朱熹にとって「楚辭」が文學作品一般とは同列に並べられない重要な意味を持ってきたとき——朱熹にとって「楚辭」が言わば運命的な存在であることが認識されてきたとき、——從來の「楚辭」注釋の生半可さへの不滿が彼の心を强く捕えたのである。

朱熹が、それまでの「楚辭」注釋者に對して表明する不滿の言葉ははなはだ嚴しい。前に引用した鄭子上に答えた手紙(四〇頁)では、現行の「楚辭」のテキストには整理を加えねばならない所が多數あり、作者の本意は正しくは現在に傳えられていない、と言う。またこれも前に述べたように、朱熹は紹熙元年十月に自ら跋文を付して「楚辭協韻」を刊行したのであるが、そののち朱熹は再び「楚辭協韻」に跋を書いて次のように言っている。(15)

……杭本の「楚辭」は校定が加えられておらず、誤りの多いテキストであるから〔この部分が誤っていても〕怪しむに足りない。ただ晁氏〔晁補之「重編楚辭」十六卷、「續楚辭」二十卷、「變離騷」二十卷〕は自ら「離騷」に深く通じているなどと言いながら、見てみればその誤りを踏襲したまま、訂正できずにいる。こうした類は他にも多い。そうだとすれば、晁氏が念を入れたのは、序文を作りかえたり篇帙を增したりして外面を飾っただけで、この書物の內容についてはなんら發明する所がなかったのである。近ごろの校定や解釋と稱されるものは得てしてこうした類で、晁氏だけに限らぬのである。私は、この書物を、かっては吟咏の一助にしたのであるが、今で

は名目にまどわされて、考察が不十分であったことを恥かしく思っている。それ故、かさねて跋文を記し、讀者にはっきり知ってもらおうとするのである。

晁補之の仕事に對する批判は「辯證」下、晁錄の條にも見え、更に嚴しい。(16)

晁補之の書物に付された新しい序は、多くの義例を立て、議論はいっぱいあるが、道理を明らかにする所もなく、この書物を云々する資格は全くない。加えて、自分は史官になったことがあるから古い文章も本朝の書物も、それに加筆削除を行なわねばならないのだとも言っている。學問のことなのに、史官だからと言いたてたりしているのは、もちろん笑うべきことであるばかりか、彼が筆削を加えたと言うのも、ただ篇の順序を入れ更えたにすぎず、加えて文字の異同の校定については、正しい判斷を示すことができずにいる。浮華の習いとして名目だけで表面を飾る惡弊は、こんなことにまでなるのだ。心せねばならない。

晁補之の「重編楚辭」は、完全に失なわれたわけではないが、いま直接それを見ることができない。幸いにその序だけは、「鷄肋集」卷三五に「離騷新序」三篇として收められている。その序などを通して知られる、晁補之がやったという仕事は、㈠「孟子」などの言葉を用いて「詩經」から流れだす文學史の中での「楚辭」の位置を定めたこと、㈡篇の次序を古いと推定される順序にならべかえたこと、㈢「楚辭」の中から王逸などの作品を除いたこと、㈣「楚辭章句」以來、各篇の前に冠せられてきた序を改作して新しいものとしたこと、などである。

こうした晁補之の仕事は、實質的には「楚辭集注」に受けつがれており、その理論づけも理知的な宋の道學先生たちの贊同を受けそうなのであるが、朱熹はそれを嚴しく批判している。テキストの校定も確實にはできぬのにそうしたもっともらしいことをして人々の目を引こうとするのは「浮華の習い」によるものだと言うのである。

こうした晁補之のもっともらしい仕事に對する幾分感情的とも見える反撥と同時に、更に注目すべきことは、「楚辭叶韻」に付した二度目の跋の中で、朱熹自身、自分の以

前の見方も表面的な名目にまどわされるばかりで、深く考える所がなかったものとしていることである。以前の自分の見方に對する不滿を二度目の跋という形で書かなければならなかったことの背後には、最初の跋と二度目の跋との間に彼自身の楚辭觀の大きな轉換という事實があったものと考えられる。舊來の注への不滿の表明は、同時にそうした注に一應は滿足していた自分の楚辭觀の否定でもあったのである。

この二度目の「楚辭叶韻」の跋が書かれた正確な年代は知られない。ただ最初の跋と第二の跋の間には朱熹の楚辭觀の轉換があり、その原因となった文學觀、更にはその背後にある人間觀、世界觀の轉換をせまる、朱熹にとっての大きな經驗があったのであろうというのが、私の推定である。

注

(1)「朱子年譜」紹興二十年庚午。
時董琦嘗侍先生於鄉人之坐。酒酣、坐客以次歌誦。先生獨歌離騷經一章。音吐鴻暢、坐客竦然。

(2)「朱子語類」巻一〇四（正中書局本四一六七頁）
某舊時、亦要無所不學。禪道文章楚詞詩兵法、事事要學。出入時、無數文字、事事有兩册。一日忽思之曰、且慢、我只一箇渾身、如何兼得許多。

(3)「文集」巻三三、答呂伯恭書
屈宋唐景之文、熹舊亦嘗好之矣。既而思之、其言雖侈、然其實不過悲愁放曠二端而已。日誦此言、與之俱化、豈不大爲心害。於是屏絕、不敢復觀。

(4) 同右
夫文與道、果同邪、異邪。若道外有物、則爲文者可以肆意妄言、而無害於道。惟夫道外無物、則言而一有不合於道者、則於道爲有害。但其害有緩急深淺耳。

(5)「文集」巻二
頃以多言害道、絕不作詩。兩日讀大學誠意章有感。至日之朝、起書此以自箴。蓋不得已有言云。

(6) 文と道の關係については、成復旺「試論朱熹對文與道關係的看法」（文學論集第二輯、一九七九年）を參照。

(7) 葉渭清「朱子與呂成公書年月考」（國立北平圖書館館刊六－一、一九三二年）。

(8)「宋史」巻四二九、道學傳三、朱熹傳（この封事は「文集」巻十一に全文が收められている。引用の便宜から「宋史」が要約したものに依る）。

陛下統德之初、親御簡策。不過風誦文辭、吟詠情性。又頗留意於老子釋氏之書。夫記誦詞藻、非所以探淵源而出治道。虛無寂滅、非所以貫本末而立大中。

(9) 「文集」卷一、虞帝廟迎送神樂歌詞。

桂林郡虞帝廟迎送神樂歌者、新安朱熹之所作也。熹既爲太守張侯栻紀其新宮之積、又作此歌、以遺桂人、使聲于廟庭、侑牲璧焉。

(10) 「語類」卷一〇七（正中本四二五二頁）。

先生每觀一水一石一草一木稍清陰處、竟日目不瞬。飲酒不過兩三行、又移一處。大醉則趺坐高拱、經史子集之餘、雖記錄雜說、擧輒成誦。微醺則吟哦古文、氣調清壯。某所聞見、則先生每愛誦屈原楚騷、孔明出師表、淵明歸去來并詩、并杜子美數詩而已。

(11) 「文集」卷八二、書楚辭協韻後。

始予得黃叔度父所定楚辭協韻而愛之、以寄漳守傅景仁。景仁爲刻板、置公帑。未幾、予來代景仁。……於是卽其板本、復刊正之。……紹熙庚戌十月壬午、新安朱熹書。

(12) 「語類」卷八〇（正中本三三〇四頁）。

某有楚詞叶韻、作子厚名字、刻在漳州。

(13) 楚辭辯證上、離騷經。

夫騷韻於俗音不叶者多。……黃長睿乃謂或韻或否、爲楚聲。其考之亦不詳矣。近世吳棫才老始究其說、作補音補韻。援據根原、甚精且博。而余故友黃子厚及古田蔣全甫、祖其遺說、亦各有所論著。今皆已附于注矣。讀者詳之。

(14) 「語類」卷八〇（正中本三三〇五頁）。

或問吳氏叶韻何據。曰他皆有據。泉州有其書、每一字多者引十餘證、少者亦兩三證。他說、元初更多、後刪去、姑存此耳。然猶有未盡。因言商頌、天命降監、下民有嚴、不僭不濫、不敢怠遑、吳氏云、嚴字恐是莊字、漢人避諱改作嚴字。某後來因讀楚辭天問、見嚴字都押入剛字方字去、又此間鄉音嚴作戶剛反、乃知嚴字自與皇字叶。

(15) 「文集」卷八二、再跋楚辭叶韻。

……杭本未校、舛誤最多、宜不足怪。獨晁氏自謂深於騷者、顧亦因襲其謬、而不能有所是正。若此類者、尙多有之。然則其所用力、不過更易序引、增廣篇帙、以飾其外。而於是書之實、初未嘗有所發明也。近世之言刪述者、例如此。不但晁氏而已。予於此編、實嘗助其吟諷、今乃自愧其眩於名實、而考之不詳也。因復書其後、以曉觀者云。

(16) 楚辭辯證下篇、晁錄。

晁書新序、多爲義例、辨說紛拏、而無所發於義理、殊不足以爲此書之輕重。且復自謂嘗爲史官、古文國書、職當損益。不惟其學而論其官、固已可笑。況其所謂筆削者、又徒能移易其篇次、而於其文字之同異得失、猶不能有所正也。浮華之習、徇名飾外、其弊乃至於此。可不戒哉。

三　舊注への不滿

朱熹の楚辭觀がこの時代の一般の楚辭理解とそれほど異ならぬものに留まっていた間は、從來の「楚辭」の注釋に對する不滿はそれほどはっきりとした形を取ることはなかったであろう。洪興祖の「補注」と晁補之の「重編楚辭」を併せ讀むことで一應の滿足を得ていたと思われる。しかし彼の楚辭觀が大きく變化し、この時代の一般の理解する所からかけ離れてしまったとき、自分を十分に滿足させる注釋がないことにはじめて氣付いたのである。

朱熹は「楚辭集注」の序文で、舊來の注に對する不滿を次のように述べている。(1)

後漢の王逸の「章句」と近ごろの洪興祖の「補注」が並んで世に行なわれている。それらは訓詁や名物については十分に詳しい。しかし王逸の書物は、作品の選擇や題のつけ方、章分けについて問題とすべき所が多いのに、洪興祖はそれらをどこも訂正できなかった。特にこの作品の本質的な意義については、兩者とも、深く思いを致して、繰り返し讀み、心を籠めて歌ってみることによって、その表現と表面の意味あいの背後にあるものを探るのではなく、簡單になにかに當てはめて說を立て、勝手な證據を引っぱってきて、强引に過去の歷史事實に結びつけてしまっている。そのためその說は、或る場合は迂遠で人間らしい心情からかけ離れ、或る場合は直接的すぎて、人としての道義を害ってしまっている。その結果、屈原がその生前に抑えられて成し遂げることができなかったものが、後世においても闇につつまれて明らかにされぬままとなっている。私は、こうした事態にいよいよ深く氣持ちを動かされた。病氣に苦しめられながら、以前からの草稿をもとに、いささか手を入れ、「集注」八卷を纏めた。

ここで朱熹は、舊注が「楚辭」の本文を十分に讀みこまぬまま、思いつきで說を立て、その說が「或いは迂滯なるを以って性情に遠く、或いは迫切なるを以って義理を害」している。そうした注釋が、屈原の本意と志とを、かえって分からなくしているのだ、と言っている。

この舊注の「迂滯」と「迫切」とを駁するため、朱熹は「集注」の本文や「辯證」の中で盛んに「文義」あるいは「文勢」ということを言う。「辯證」の離騷の部分からいくつか例を擧げよう。(2)

王逸は「靈鎖（天上の門）」を楚王の宮門だとする。文義にそむいている。

王逸は「虙妃」で隱士を喩えたものだとする。これが文義にそむいているうえ、「蹇脩」を伏羲の臣下だとするのも、なにを據り處にそう言うのかわからない。また「隱者は出仕を承諾しない。だから隱者と共に主君に仕えることはできないのだ」と言うが、不必要な説明だ。

また「高辛で諸侯の內の賢君を喩えた」とも言うが、これも文勢にそむいている。

ここで「文義」「文勢」などの語で朱熹が言おうとしているのは、作品全體の意味的な脈絡の意であるが、それも道義的な意味づけというのではなく、特に文學作品としての表現の面に視點を置いたものであった。そのことは同じく「辯證」に見える次のような言葉からも推察されるであろう。(3)

「兩の美しきものは必ず合う」というのも、男女の關係に託して表現したものである。注釋が、君臣關係としてのみ說をなしているのは、その意は得ていても、その辭は正しく捕えていない。

朱熹は「意」と「辭」とが別々に獨立することを認め、更に彼の語勢は「其の辭」を正しく捕えることがまず大切であると强調するようである。同樣に表現と意味とに乖離を認める見方は「辯證」の次のような言い方の中にも見ることができる。(4)

王逸の注は、意には近いが語からははずれている。いったい先人たちはどんな學問をしていて、文義が明明白白であるのに、こんなにも的はずれの〔解釋をする〕のか。……これはその本意は得ていても、詞命の曲折は捕えそこねているのである。

朱熹の「集注」の背後にある楚辭理解の最も重要な點は、この「意」と「辭・語・詞」との乖離をしっかりと見きわめ、更に「辭（文學作品としての表現）」の方を軸として作品

を理解しようとしたことにある。この兩者の乖離の作品の中での具體的なあらわれ方について、「語類」巻六六は次のような言葉を記錄している。(5)

「易」は、その實用的な目的は卜筮のためのものであって、深遠な道理は內側にあり、その道理を直接述べることはしていない。ちょうど「楚辭」にあって、神を主君とし、その神を祀る者を臣下として、〔神と祭祀者との關係を通して、主君に對する〕絶えざる尊崇の意を表したのと同樣である。「楚辭」は、もちろん君臣關係のことを言っているのではあるが、それが神を齎くことに託して表現されている。だからまず神を齎くこととして〔の表現を〕說明し、その上で主君に仕えるという意味あいまで說明を及ぼさなければならない。現在の理解は、ただ單に主君に仕えることとしてのみ解釋されているが、それが正しくないというわけではないにしろ、ただまず神を齎くという一段階を正しく處理しおわってから、主君に仕えるという部分にまで及ばねばならないのである。

こうした朱熹の視點が最も成功を收めているのが「九歌」十一篇に對する理解であろう。すなわち朱熹は「九歌」をその表現の面で見る限り、そこには神と祭祀者の關係が歌われているので、君臣關係の含意はあくまでもその背後にあるのだとする。加えて神と祭祀者との間に結ばれる戀愛關係は、男神を女巫が招き降し、女神を男巫が招き降したことに起源すると、その祭祀の樣式にまで遡って「九歌」を理解しようとしているのである。

離騷篇の序の注に、朱熹は「楚辭」を詩經の變風・變雅のもう一段〝變〟じたものとして位置づけると同時に、その表現には賦・比・興があり、このことをしっかりわきまえれば、詞の意味はわかってくる、と言う。實際に離騷篇の一句一句、あるいは一章ごとに、その一句が「賦」であるとか「比」であるとか、時には「比にして賦」「興にして比」、更には「比にして比」と言った注釋が加えられている。こうした詳細な注意書きも、上述の意味と表現との乖離を讀者に少しでも分かりやすく說明しようとする努力であったと考えられよう。

同様に「集注」の序に、これまでの注が「迫切なるを以って義理を害す」と言うのも、この兩者の乖離を認めず、「義」ばかりで「楚辭」を理解しようとしていることに對する不滿の表明である。この「迫切」の「迫」の語は、「辯證」の中で盛んに反價値的に用いられている。なかでも特に「九歌」の解釋に關して「迫」の字が用いられることが多い。これは前述の朱熹の「九歌」の理解からする當然の歸結であろう。

「辯證」の九歌總論とも言うべき所に次のように述べる。(6)

思うに君臣關係という意味から言えば、「九歌」全體が神に仕えるということでそれを比喩しているので、他の意味は雜えていない。神に仕えるという意味から言えば、「九歌」の各作品の中には、それぞれ賦や比や興による敍述があって、表現の對象となる具體的な事物がある。ところが後代の讀者には全體が比となっていることが分からぬものだから、考えの淺い者は、全然別の所を穿鑿して的はずれとなり、よく考えた者も背後の意味を直接あげつらって「迫り」すぎてしまう。更にひどい場合には作品中の文義の曲折までものがしてしまう。みなこれがもともと心中にあるものが口をついて出たものだという本來の意味あいを失なってしまっている。「楚辭」諸篇に對する誤解の中でも、この九歌に對するものが最も甚だしい。いま、それを正さぬわけにはゆかない。

具體的には、特に「九歌」の神々をそのまま主君を指したものとする舊注が「迫り」すぎているとして非難される。(7)

「補注」はまた、雲神でもって主君の德を比するが、懷王（屈原が仕えた楚王）が雲神のごとくでありえないため、心は憂えるのである、と言う。これらは外がわから不必要な說をくっつけたもので、全篇の大旨を害い、わざわざ煩瑣な意味づけをして、本文の正しい意味をまぎらわしくするものだ。それに雲神を以って主君を指したとするのでは「迫り」すぎてはいないだろうか。

「龍に乘りて天に沖し、ますます人を思愁せしむ」の句について、「補注」は、主君がおのれを捨てて顧みないことだ、と言う。意は正しいが、語は「迫り」すぎている。

朱熹「楚辭集注」攷（小南）

後者の例でも、意と語との乖離關係が取り上げられているように、「迫る」というのは、文學としての表現を無視して解釋することに對する非難なのである。

更にもう一つ、舊注に對する朱熹の不滿が集中する點を擧げれば、王逸、洪興祖の兩注は訓詁名物には詳しいが、しかしそれが興味本位で、雜多なものを無制限に注に取りこんでいるということである。こうした面に對する朱熹の批判的口吻は、天問篇の注に最もよく表れている。その序の注に次のように言う。(8)

この篇（天問篇）の問いかけには、時に奇怪で根據のないものもありはするが、道理で推し測れること、教訓とすべき事がらが、なお多く含まれている。しかるに舊注の説は、たくさん不思議なことを識っていることを手柄がおに述べるだけで、なぜ問われたのかという本意と、現在これにいかに答えるべきかという明確な方法が分かっていない。……「補注」の説は、雜多なばかりで選擇を加えることも知らず、更にそれをひどくしてしまっている。ここで私は「舊來の注の中から」不可缺なものだけを殘して、しかもその全てに道理の觀點から是正を加えた。

朱熹は、離騷篇に對する「辯證」においてすでに、(9)

縣圃とか閬風とか扶桑とか若木とかいった類のものとなると實在のものでもなく、考證する必要もない。ここではそれぞれにそのあらましだけをのこし、種々の説を全て載せ詳細に説いたりすることはしなかった。

と言い、神話的な地名や動植物に對しては、「信を考うるに足らぬ」ものとして、注釋を最小限に止めている。そして天問篇では、「此の章の義は未詳」あるいは「此の章は大抵荒誕にして説なし。いま亦た論ぜず」などといって、舊注が無理につけている説を反駁するだけで、朱熹自身の意見は述べず、分からぬと言って投げ出している所が特に多い。

あるいはこれを朱熹の、神話的思考に對する無理解の表れだと言うことができるかも知れない。たとえば天に十個の太陽が一緒に出たとき羿がそれを弓で射おとしたという

傳說について、もともと日付けに甲から癸までの十干があることが誤解されて十個の太陽となったのだと說明するのがそれである。またこうした神話傳說を多く留めている「山海經」の成立について、「辯證」は次のように言う。[10]

たいてい昔から天問篇を說明する人々は、「山海經」と「淮南子」を據り處として解釋するのであるが、文意から考えてみるに、この二つの書物は、もともと天問篇の問いに答えを出すために作られたものではないだろうか。しかもここで問われていることは、戰國時代に民間で行なわれた傳說にすぎない。ちょうど現在世間に傳えられている僧伽が無之祈（水神）をしずめたとか、許遜が蛟蜃の精を斬ったとかいう類で、もともとでたらめ極まることなのに、好事の者がそれにかこつけて書物を作りあげ、本當らしくしてしまったのだ。道理に通じた者はこれらをみな一笑に付して退けてよく、それをわざわざ議論する必要など全くないのだ。

この「山海經」と「淮南子」とを天問篇の質問に答えるために作られた書物だとする說は、「語類」卷一三九にも見える。[11] その條の記錄者は黃義剛。田中教授「弟子攷」一八一頁によれば、彼の師事は紹熙四年（一一九三年）と慶元三年（一一九七年）から慶元五年までの二度であるとされる。「語類」にはまた林夔孫（一一九七年以後の師事）との天問篇についての議論が錄せられ（現行本では前條に續く）、その意見も「辯證」にそのまま收められている所から考えて、この條は二度目の師事期のものと考えてよいであろう。すなわち朱熹がちょうど「集注」を編んでいたと考えられる時期の發言である。

天問篇と「山海經」「淮南子」の成立に關する相互の關係については、現在でもなお十分に解明されているわけではない。ただ天問篇の質問に解答するために「山海經」や「淮南子」に載る神話傳說が作りあげられたとするのは、直ちには承認しがたい說である。[12] こうした理解のしかたの中に、朱熹の近代につながる合理主義精神に、かえって民間傳承の持つ意味あいを十分には捕え切れぬ面があったことが示されている。そうしてそれは楚辭の文學的な內容にも關係して、朱熹の楚辭理解に一つの限界をもたらす。た

とえば離騒篇で主人公が天界の遊行に出發しようとする所に注をして、朱熹は次のように言う。(13)

これより以下は多く假託の語であって、實際にそうした物やそうした事があるのではない。

こうした言わずもがなの言葉の中にも、朱熹の、そうしてその時代の、いささか硬直した合理性の一面が窺われよう。もちろん我々の合理性が朱熹の限界を大きく超えているという保障はあまりないのであるが。

同時に注意しなければならないのは、朱熹が「山海經」的な世界を全面的に拒否しているのではないということである。天問篇の「辯證」の中でも、一日に數百里を走る不思議な蛇が今も嶺南にいるそうだとか、朱熹自身が山中の人から聞いた話しとして、大蛇を退治するのに木製の鷄卵を用いることなどを記錄し、また天問篇の注では、山中に不死の人がいて、子孫はその人を雞窠の中に藏しているという俗傳を引き、「亦た或いはこれ有り。怪しむに足らざる也」とコメントを付けている。太古の時代も、朱熹にとっては、現在と完全に同一の地平の上にある世界であって、太古であるが故に珍奇な事物が存在し、不可思議なできごとがおこるのだという考え方は承認しがたかったのである。(14)

朱熹の舊注に對する不滿は、それらが、現在から遠く離れた過去である故に不思議なこともおこりえるとして、無制限に傳說などを利用して附會し、それだけで事足れりとしている態度にあった。傳說的で珍奇な事實を集めることだけに努力が集中され、その結果として作品自體の持つ意味（現在につながる意味）が問われなくなることを嫌ったのである。朱熹が天問篇の質問の各條に、柳宗元の「天對」を超えた解答を與えようと試みているのも、作品自體の持つ意味を彼なりに明らかにする手段であったのである。

舊注の、むやみと珍奇な傳說を引用して事足れりとし、あるいは强引な〝望文生義〟を行なって解釋することに對する非難は、これも作品の表現をまず第一に大切にするという彼の文學の方法に裏づけられていた。一例を擧げよう。天問篇の中ほどの殷の始祖たちの傳說を述べた部分に、

該秉季德　厥父是臧

の二句があり、そこから少し離れて

恒秉季徳　焉得夫朴牛

の二句がある。「補注」は、前の二句を「夏の啓王が禹王の末徳をひろく受けつぐことができたので、父の禹王はそれを善しとして、天下を我が子に傳えた」と讀み、後の二句は王逸の注をそのまま引きついで「湯王は契（殷の始祖）の末徳を變ることなく保持しそれを擴げたので、天に嘉みせられ、田獵の際、大きな牛を得るという嘉瑞を得た」ことを言うと解釋している。

これに對して朱熹は、最初の部分には「此の章は未詳。諸説も亦た異る」と注し、後の二句を含む一章に對する注には、舊注を引いたあと、次のように記す。(15)

この篇には「秉季徳」という表現が二度出るが、それに對する〔注釋家たちの〕説はこのように異なっている。思うに本文の意味がもう分からなくなっていたのを、注釋者がそれにでたらめに解釋を付けたのである。

似た表現が並べばその意味も似たものでなければならないという素朴な考え方が、舊注の説が單なる望文生義のものに過ぎないという確信に導いているのである。

ここで朱熹は「秉季徳」という表現が二度見えることだけを指摘して、自分の説は立てない。實は天問篇のこの部分は、二十世紀になり、甲骨資料による殷の王系の復元が行なわれてはじめてその意味が知られることになるのである。すなわちここに見える「該」「季」「恒」はいずれも殷の先王の名で、上圖のような系譜が復元された。(16)その結果、該の字をかねてと讀み、季をすえと讀み、恒をつねと讀む舊注の解釋は、全くの望文生義であることが知られた。したがってこうした資料のない朱熹の時代にあっては、「該秉季徳」と「恒秉季徳」の二句が同じ構造を取ることを指摘するだけで他は言わない彼の態度は、あたう限り最も正しいものであったと言えよう。

以上いくつかの方向から見てきた舊注の不十分さを乗り越えるため、朱熹は「集注」において、注釋の形式の面においても、いくつかの新しい試みを行なっている。注釋と

季——該（王亥）
　——恒（亘）——上甲微

朱熹「楚辭集注」攷（小南）

は別に「辯證」を附して、楚辭全體を見通した上でのより一般的な説明を行なう部分を置いたことが最も大きい試みである。それに加えて、個々の句に密着した注釋の部分にも、その形式に舊來のものとは違った所がある。

王逸が本文の一句もしくは二句ごとに注を插むのに對し、朱熹は基本的には四句をひと纏めとして注を加えている。これは舊注が一句一句を言わば行きあたりばったりに「斷章取義」的に解釋し、前後の脈絡は重視せぬのに對して、少しでも多くの句をひとまとめに注釋することにより、單語の意味のみの解釋に止まらず、その一章のまとまりの中での意味を明らかにしようとするものであったろう。更にこうした四句單位ではまとまらない意味的脈絡は、處々に次のような言葉を插んで、指摘されている。「集注」離騷篇(17)。

「靈脩を怨む」からここまでの五章は、ひと纏まりの内容で、下章の「車を回し路に復す」の枕となっている。

こうした注釋の方法について朱熹自身、次のように説明する。「辯證」離騷篇(18)。

おおよそ詩を説明する場合、もちろん句ごとに解釋を加えねばならない。けれどもそれだけでは其の句中における言葉の意味が表わされるだけであって、一章の中での、上下相い受け、前後相い應じた全體の意味あいについては、當然一章を通じて論ずることではじめてその意味が捕えられるのである。

この朱熹の言葉はきわめて平凡なことでもある。彼の「楚辭集注」の成果は、この平凡なことを確實に具體化したことから生み出されたのだと言える。すなわち、一つの文學作品の中にいく層かの高さの意味的な脈絡があることを正しく認識し、しかもそれぞれの高さの意味的な脈絡が、低次のものが高次のものに全面的に依存するのではなく、獨立し並行して存在していることを理解する、いわば複眼の視點を支える強い精神を保ち得たことに由來している。この精神を背景にし、一方では「大義」に、一方では個々の單語のこまごまとした注釋に分裂していってしまう舊注の方法が乘り越えられ、「楚辭集注」は新しい世界を切り開くことができたのである。

注

(1) 楚辭集注序

東京王逸章句與近世洪興祖補注、並行於世。其於訓詁名物之間、則已詳矣。顧王書之所取舍與其題號離合之間、多可議者、而洪皆不能有所是正。至其大義、則又皆未嘗沈潛反復、嗟歎咏歌、以尋其文詞指意之所出、而遽欲取喻立說、旁引曲證、以强附於其事之已然。是以或以迂滯而遠於性情、或以迫切而害於義理。使原之所爲、壹鬱而不得申於當年者、又晦昧而不見白於後世。予於是益有感焉。疾病呻吟之暇、聊据舊編、粗加櫽括、定爲集註八卷。

(2) 辯證上、離騷經。

王逸以靈瑣爲楚王省閤、非文義也。

王逸以虙妃喻隱士、既非文義、又以蹇脩爲伏羲氏之臣、亦不知其何據也。又謂隱者不肯仕、不可與共事君、亦爲衍說。又或謂以高辛喻諸國之賢君、亦非文勢。

(3) 辯證上、離騷經。

兩美必合、此亦託男女而言之。注直以君臣爲說、則得其意而失其辭也。

(4) 辯證上。

王注意近而語踈也（離騷經）。

不知前人如何讀書、而於其文義之曉然者、乃直乖戾如此。……此乃得其本意而失其詞命之曲折也（九歌）。

(5) 「語類」卷六六（正中本二六〇一頁）。

易以卜筮用、道理便在裏面、但只未說到這處。如楚辭以神爲君、祀之者爲臣、以見其敬奉不可忘之義。固是說君臣、但假託事神而說。今也須與他說事神、然後及他事君之意。今解直去解作事君、也未爲不是、但須先爲他結了事神一重、方及那處。

(6) 辯證上、九歌。

蓋以君臣之義而言、則其全篇皆以事神爲比、不雜它意。以事神之意而言之、則其篇內又或自爲賦爲比爲興、而各有當也。然後之讀者、昧於全體之爲比、故其踈者以它求而不似、其密者又直致而太迫。又其甚、則幷其篇中文義之曲折而失之。皆無復當日吟咏情性之本旨。蓋諸篇之失、此爲尤甚、今不得而不正也。

(7) 辯證上、九歌。

補注又謂以雲神喻君德、而懷王不能、故心以爲憂。皆外增贅說、以害全篇之大指、曲生碎義、以亂本文之正意。且其目君、不亦太迫矣乎。

乘龍沖天而愈思愁人……補注謂喻君舍己而不顧。意則是而語太迫也。

(8) 楚辭集注天問第三序注。

此篇所問、雖或怪妄、然其理之可推、事之可鑒者、尙多有之。而舊注之說、徒以多識異聞爲功、不復能知其所以問之本意、與今日所以對之明法。……若補注之說、則其厖亂不知所

擇、又愈甚焉。今存其不可㠯者、而悉以義理正之。

(9) 辯證上、離騷經。

至於縣圃閬風扶桑若木之類、亦非實事、不足考信。今皆略存梗槩、不復盡載而詳說也。

(10) 辯證下、天問。

大氏古今說天問者、皆本此二書。今以文意考之、疑此二書本皆緣解此問而作。而此問之言、特戰國時俚俗相傳之語。如今世俗僧伽降無之祈、許遜斬蛟蜃精之類。本無稽據、而好事者遂假託撰造、以實之。明理之士、皆可以一笑而揮之、政不必深與辯也。

(11) 「語類」卷一三九（正中本五二九七頁）。

楚詞注下事、皆無這事。是他曉不得、後却就這語意撰一件事爲證、都失了他那正意。如淮南子山海經、皆是如此。

(12) ちなみに言えば、「文集」卷七一に「記山海經」と題する一文があり、そこに見える次のような指摘は鋭いものである。

予嘗讀山海諸篇、記諸異物飛走之類、多云東向、或云東首、皆爲一定而不易之形。疑本依圖畫而爲之、非實紀載此處有此物也。古人有圖畫之學、如九歌天問皆其類。

(13) 楚辭集注離騷第一「溘埃風余上征」注。

此以下多假託之詞、非實有是物與是事也。

(14) なおこれは纏めて別に論ずべきことであるが、朱熹の著述や注釋を讀んでいてしばしば驚かされるのは、彼の歷史意識と我々の歷史意識との大きな質的な差違である。朱熹にとっての歷史は、上昇や下降はあるにしても、その中に質的な變化があるとは考えられないもののようである。すなわち古代人も結局は現在の人と同じ心情で生活していたのだと確信されていて、社會が變化するとき、人の心の構造も變質してゆくのだという觀點は見出だしがたい。この天問篇の解釋で、太古を不可思議な時代とするのに反對すると同時に、現在ある不思議なことは太古にもあったとしているのは、そうした歷史觀の一つの表われであろう。

もちろんこうした歷史觀は朱熹一人のものではなく、中國の儒教的唯心論に共通なものであって、さればこそ古代の經典が直接的に〝我が心の脚注〟となりえたのである。

(15) 楚辭集注天問第三。

此篇言秉季德者再、而其說不同如此。蓋本文已不可考、而說者又妄解也。

(16) 王國維「殷卜辭中所見先公先王考」（觀堂集林卷九）など。

(17) 楚辭集注離騷經第一。

自怨靈脩以下至此五章一意、爲下章回車復路起。

(18) 辯證上、離騷經。

凡說詩者、固當句爲之釋。然亦但能見其句中之訓故字義而已。至於一章之內、上下相承、首尾相應之大指、自當通章而論之、乃得其意。

四　怨みの文學

以上に述べてきたような舊注に對する不滿を一つの原動力として「楚辭集注」は著わされた。「集注」の名からも知られるように、その內容の大部分は、王逸の「章句」と洪興祖の「補注」の意見を取捨選擇しつつ轉載して成ったものである。「集注」は、分量的に言えば「補注」などよりずっと簡潔になっている。舊注の雜多に並列された意見の中から、ぎりぎり最小限必要なものだけ取り出し、それを新しく組み立て直おすことによって、朱熹は彼獨自の楚辭の世界を讀者の前に提出しているのである。舊注の無統一で雜多な說の中にうずもれていた一行が、朱熹によって取り出され、別の部分からこれもぎりぎりの選擇でもって取り出されてきた他の一行と組み合わされるとき、それぞれの一句がこれまで氣付かれなかった重い意味あいを帶びてくる。この最小限で不可缺なものを確實に選擇して組み合わせる朱熹の手法は、みごととしか言いようがない。

この朱熹の確實な選擇によって描き出される楚辭の世界は、きわめて平靜なものである。そこでは朱熹の感傷や思い入れは極力排されている。こうした注釋の態度は、實は彼の楚辭觀の必然的な結果でもあった。すなわち朱熹は「楚辭」という作品自體が平靜な心情の上に立つもので、その表現もきわめて平明なものと考えるのである。

それまでの人々がややもすれば「楚辭」を思い入れたっぷりな、おどろおどろしいものとして理解しようとする傾向にあることに朱熹はいろいろな所で反對を表明している。「語類」卷一三九に言う。(1)

古人の文章は、だいたい普段通りに述べただけのものでありながら、その中に自然と深い意味が備っていた。後代の人の文章は、わざわざ作意して書くので、通りの惡いものになってしまう。たとえば「離騷」は、なにのこった表現もなく、ありのままに口に出して、自然とすばらしいものになったのだ。

「楚辭」は平明なものなのだ。後の時代の模擬をする人々が、かえってむつかしく意味ありげなものにして、〔彼らの作は〕まるで分からない。

朱熹「楚辭集注」攷（小南）

同じく「語類」巻一三九に、「楚辭」卜居篇の難解な表現について次のように言う。(2)

それぞれの字の意味は、昔からよく分からない。しかし文意から見れば知ることができる。たとえば「突梯滑稽」と言うのは、べったりと迎合し、人のなすままに立ったり倒れたりするという意味にすぎない。こうした表現には少しの澁滯もない。思うに口から出るままにこのように表現して、それでみな文章になったのだ。

これは單に卜居篇の表現だけを指して言うのではなく、「楚辭」全體に通じた指摘であることは言うまでもなかろう。

このように「楚辭」所收の諸作品を、口から言いだされるままに文字にし、それがちゃんとした文章になったのだとするのは、朱熹が優れた文學の基本的な性格の一つとする「做(つく)る所のない」作品という點に合致するものである。ここで朱熹の文學觀の形成について通觀するいとまはないが、彼が最終的に到達したのは文學の「流出論」であり、「楚辭」に對するこうした位置づけもそれを背景にしたものであったことは指摘できよう。

文學と政治（イデオロギー）との關係について、朱熹は、蘇東坡のような文學中心主義（それに色をつけるために思想を外から持ちこむ）に強く反對すると同時に、文學を意圖的にイデオロギーに奉仕させることにも贊成しない。前に述べた〝文學は道を害する〟という教條を信奉していた時期にも、〝道〟と文學とは密接な關係を持ちながらも、それぞれに獨立して存在することを認めている。彼は、心中に〝道理〟をしっかりと保てば、そこから流出するものが自然と優れた文學となると言うのである。したがって兩者の間には、なんらの虛飾のない、平明な關係が結ばれる。(3)

この優れた作品の背後には平明さ、平易さがあるという主張は、單に「楚辭」に關するだけの視點ではなかった。彼が「詩經」に對して、小序を排し、政治的、倫理的な解釋に重點を置かなかったこととともその根を一にしている。

「語類」巻八〇に(4)

程先生の詩傳は義ばかりを問題にしすぎている。詩經の詩人たちは平易であって、恐らくそんな風ではなかっ

たろう。

張横渠は、心を平易な狀態にしてこそ詩經が分かると言う。しかし横渠の詩經の解釋は、その多くが平易ではない。

などと言い、道學者流の「義」を中心とした解釋も、平易でないものとして否定されている。朱熹の文學者としての資質と、それに裏づけられた文學の「流出論」とが、道學先生たちの觀念的な文學理解に滿足しなかったのだと言えるであろう。

朱熹は、上引の例からも知られる通り、平易という言葉を單に表現の平明さだけを言うものとして使ってはいない。より重視しているのは、表現の背後にある作者の心情、製作の動機の平明さである。「楚辭」についても、屈原は決して一般に考えられているような屈折した心情——怨み——によってこの作品を作ったのではないと主張する。「語類」卷一三九に言う。(5)

「楚辭」はそんなに主君を怨んでいない。ところが注釋する者たちがみな主君を怨んだものと解釋して、めちゃくちゃになってしまった。九歌篇は神を借りて主君となし、人が神から隔たって近づくことができないのは、ちょうど自分が主君のそばに仕えることができないのと同樣だという意を表わしているのである。こうした點から見れば、作者は主君を怨んでいるのではない。……今の人が文章を解釋するとき、大意を見ず、ただ句ごとに解釋をするので、文意が通じなくなる。

「楚辭」著述の動機を作者の〝怨み〟に求めるのは、言うまでもなく、司馬遷「史記」が屈原の傳に「屈平の離騷を作るは、蓋し怨みより生ずる也」と述べて以來の、傳統的な楚辭理解の方法であった。司馬遷は自らの境涯にまつわる怨みと重ね合わせることによっていわゆる發憤著書の說を展開した。そうして司馬遷ほど自らに引きつけずとも、以後の「楚辭」解釋は、多かれ少なかれ各作品中の語句を屈原の不遇の生涯と結びつけて解し、作品を生み出した原動力を不遇の中での鬱屈した思いであったとする傾向にあった。それに對して朱熹は、作者に主君への愛慕の念はあっても怨みの心はなかったと主張するのである。

朱熹「楚辭集注」攷（小南）

主君への怨みから「楚辭」が著わされたとすれば、表現された文句は主君への非難を含意することになる。たとえば班固がその「離騷序」の中で、屈原は「懷王を責數す」と言う如くである。しかし朱熹は、決してそんなことはないと言う。「語類」巻一三七(6)。

屈原の著わす「離騷（＝楚辭）」數篇を見るに、全て懷王に心を寄せ、捨てて去るには忍びない意を表わしている。だからこそ心をこめていく度も同じことを述べて止まないのだ。一句たりとも懷王を罵ったりする言葉はありはしない。それに屈原に狹く輕はずみな心があったとも見えない。後に自らの鬱屈の捨て所もなく、どうしようもなくなってしまったとき、河にとびこんで命を捨てた。ところが近ごろの人は一句ごとに全て懷王を罵ったものと解釋する。こうした言い方は、屈原に無實の罪を被せるものだ。平心にその語意を見ぬからこそ、こんな解釋をすることになる。

このように朱熹が「楚辭」を怨みの文學として捕える說を極力排したのは、それがきわめて俗受けしやすいものであって、そうした解釋によって理解される「楚辭」の世界が淺薄なものに流れやすいという實情への不滿によるのであろう。「楚辭」の傳統が怨みから不平不滿を述べるものへと風化されてゆき、その行き着いた先が劉向、王逸らの作品であった。朱熹は、晁補之のゆき方を一段とおし進め、「病いあらずして呻吟する者」として、元來、王逸の「章句」本には收められていた、東方朔の「七諫」、王褒の「九懷」、劉向の「九歎」、王逸の「九思」を「集注」から除き、逆に賈誼の「弔屈原」と「服賦（鵩鳥賦）」とを加えている。この場合、朱熹にとって〝怨み〟に結びつく安易さが問題なのであって、嚴然たる〝怨み〟までも排除するものではなかったと思われる。だから、例えば「楚辭後語」胡笳第二十では(7)、

胡笳（胡笳十八拍）は蔡琰が作ったものである。後漢の文士で楚辭形式の文學に心をむけた者は多い。しかしそれらの人々の作品を載せずに、ただこの胡笳だけを選んだのは、それが楚辭の表現様式をこまごまと用いているのではないが、作者の哀怨の感情が心の奥そこから發

した、やむにやまれない表現であって、つまるところ病氣でもないのに呻吟して作ったような作品よりずっと優れていると考えるからである。

と言って、哀怨に發したやむにやまれぬ作品を高く評價しているのである。

「楚辭」を平易なものとして理解する囚れない觀點が、「楚辭集注」の現在にもなお生きる價値を生み出した、一つの源泉になったと言えるであろう。しかし一方、朱熹が、「楚辭」は怨みの文學ではない、屈原は主君を非難しているのではないのだ、と強調して述べるとき、その言葉を當時の朱熹の境涯の中に置いてみれば、それが純粹に「楚辭」製作の動機についての客觀的な指摘という範圍をこえて、微妙な色あいを帶びてくることも否めないであろう。すなわち言外にある部分にどの程度の重みを持たせるかは別にして、朱熹自身の、自分は〝僞學〟の彈壓は受けても主君を怨んでいるのではない、非難してはいないという辯解として、表面の意味と二重うつしになって我々の目に映らざるを得ないのである。

前に述べたように「楚辭集注」の完成は朱熹の最晩年のことであり、それにさきだって彼の楚辭觀に轉換があった。そうして資料の年代的な檢討から、朱熹の楚辭觀の轉換は、〝慶元退歸〟の事件に直接あるいは間接に觸發されたものと考えられた。これを契機に彼の楚辭觀がそれまでの一般の楚辭理解を越えてしまったことが、舊注への不滿をもたらし、朱熹は新しい注釋を作らねばならなくなったのである。

この〝慶元退歸〟の事件が朱熹に楚辭觀の轉換を強いたのは、この事件を通じて彼が人間關係についてのそれまでの見方を變えねばならなかったこと——極言すれば人間關係について多くの面で彼が絶望をしたこと——に、その深い原因があったと考えられる。

〝慶元退歸〟直後の朱熹の手紙には、弟子たちが去り、友人もなく、自分は一人ぼっちだと書きたてるものが多い。第一章ですでに引用した「文集」卷五六の鄭可學への手紙（四〇頁）がその一例である。なおいくつか例を加えれば、

「文集」巻五三の劉季璋（劉黼）にあてた第六の手紙では次のようにいう。(8)

私は氣力を失ない門も閉ざしたままで、話しをするほどのこともありません。ただ氣づかれが前よりもずっとひどくなりました。書を讀むことをやめようとはしませんが、この先、〔自分の學問が〕大きく進歩することもありますまい。外（そと）の事は決して口にのぼせようとは思いません。見てみれば友人たちは、こうした風向きの中で、多くの者が浮き足だっております。ましてやこの〝道〟をになって將來に傳えて欲しいと願っても、おそらく當てにはできぬことなのでしょう。

春陵へ流されてゆく途上の蔡季通（元定）にあてた手紙では、自分の死に言及している。(9)

私の足の病氣は、さきごろ幾度かひどくなり、今は少しおさまっておりますが、いったいどうなることやら分かりません。氣力は日々にうすれ、體力も日々に衰えてゆきます。年來の學問はすさみ、退歩ばかりで進歩はありません。おそらく、このまま埋れたままで人々の間に名の聞こえることもなく死んでゆくばかりでしょう。

そうして蔡季通にあてた最後の手紙では次のようにいう。(10)

私は正月早早病氣にかかり、今もまだ平癒しません。今日やっと筆をとってお手紙を書くことができました。足の方はまだ普通に歩くことができません。體力は日々に衰え、この先、どうやら長くもなさそうです。病氣でつくねんと坐っているものの、心のどやかに休養することもできません。書物をめくって見れば、すぐに前の時代の人々〔の説〕が疏略で缺點の多い（？）ことが目に付きます。そのことを人に告げたいと思っても、告げるべき人がおりません。そこで書物を著したいという氣持ちがおさえがたく起こります。これも休養に対する魔の障げです。それを追い拂おうとつとめますが、どうすることもできません。それにつけても嘗ってあなたにお目にかかった時の樂しかったことがとてもなつかしく偲ばれます。しかし、この生涯にもう一度むかしのようにごいっしょする機會があるかどうかわからぬのです。

このように自分の病氣を言い立て、語るべき者がいない

と強調しているのは、單にそうした事態に直面した朱熹の心弱いぐちなのではなく、人間關係への絶望が彼を打ちのめし、それが精舍の草に埋もれて自分は一人ぼっちだ、という自虐的な心象風景を結ばせたことによるのであろう。そして蔡季通への最後の手紙にも見えるように、現在かたわらに語るべき者がおらず、加えて自分の生命の長くないことを知って、抑えがたい著述の願望が朱熹の心を占めている。彼はその讀者を後世に求めようとしていたのである。

「集注」の序文で、「楚辭」の內容が激情に走って中庸にはずれる所があるとは言え、窮極的には「三綱五典の重きを增す」ものであること、またこれまでの注釋がみな屈原の眞意を捉えていないことを述べたあと、最後の一段で朱熹は次のように言う。(11)

病氣に苦しめられながら、以前からの草稿をもとに、いささか手を入れ、「集注」八卷を纏めた。希望するのは、讀む者がこれによって千年も昔の作者を目の當りにすることができ、しかも作者が蘇生できたとしたら、千年も後に自分を分ってくれる人がいることを知り、後の世の者が自分のことを聞き知っていないと遺恨に思わぬほどのものであることだ。ああ、悲しいことだ。こうしたことは俗人に語るのは困難なのだ。

いわば道學的な視點で「楚辭」の價値をその政治的有效性から述べだしたこの序文が、その最後になって突然に「嗚呼、悕いかな。是れ豈に俗人と言るに易からんや」と言って終る。このいささか唐突で激情的な表現は、朱熹が「楚辭集注」の仕事に託そうとしたものを、その感情的な面で暗示するものであろう。すなわちこの仕事の背後には彼の〝俗人〟たちへの深い絶望があり、この仕事には彼らへの訣別の意がこめられていたのだと推定されるのである。序のこの一段と考え合わすべきは、遠遊篇の最初の「往者余弗及兮、來者吾不聞」という句につけられた朱熹の注語である。(12)

神仙脫俗の說が、そんな道理はなく、期待できないのは、明白なことだ。〔しかるに〕屈原がこうした說に終始心を引かれていたのはなぜだろう。それは〔本文にあ

るように」過去のことは呼びかえすことができず、未來のことはそれを聞知することができない——だから長生を得てそれらを親しく見聞したいと願ったのだ。しかし〔過去と未來のうち〕過去が呼びかえせないということは、もういかんともしがたい事となっている。ただ未來が聞知できぬという方については、〔それをあきらめ切れない。すなわち〕このままでは、正しい道に從いながら幸福がめぐりこず、惡逆を行ないながら不幸には出會っていない世の人々について、さまざまな經緯を經てなるようになり、ついには天の法則が人間的なもの全てを壓倒して〔實現される中で、それぞれが應報を受けるという〕終極を、自分は親しく目にすることができないままになってしまう。これでは人はその死後に無限の悲恨を遺さぬわけにはゆかない。さればこそ屈原はいささかでもよいから壽命を延ばしたいと願い、期待できない〔と分かっている〕神仙脫俗に萬一の望みをかけたのだ。ああ、〔この屈原の心は〕はるかなものだ。俗人たちにそれを語るのは困難なのだ。

屈原は神仙長生の說の虛妄であることは十分に承知していた。しかし世の中の不公平に對する深い遺恨が、神仙となって長生し、後の世でのその結末を見るという萬一の僥倖に望みをかけさせ、遠遊篇を生み出したのだ、という。そうしてその最後を、「集注」の序文とほぼ同樣の「嗚呼、遠いかな、是れ豈に俗人と言るに易からんや」という言葉で結んでいるのである。[13]

このように心をこめて屈原の心情を朱熹が說明するとき、これはほとんどそのまま朱熹自身の心を語っていると言えるであろう。自分に對し不公平な世のなりゆきを、生き延びてその結末まで見とどけたかったのは朱熹自身であり、或いは「集注」の序に見えるように、その志は當時の世に誤解され、後世にも理解されず、千載の後にそれを明らかにしてくれる者を待っているのは、屈原であると共に朱熹自身でもあった。俗人たちには理解されぬ自らの志を、千載の後の知己に明らかにしてもらう媒介として「楚辭集注」を著したのだと、その序文に二重の意味を重ねて讀むことも不可能ではないであろう。

「俗人」に對する絶望は、具體的には韓侂胄の事件の中で、多くの人々の、朱熹にとっては心外な出處を見たことが直接の原因となっていたのであろう。そのことを最も端的に示すのは、「楚辭後語」に收められた揚雄の「反離騷」に付けた朱熹の注と跋文である。

揚雄の「反離騷」は、君子は時を得たときには大いに自らの道を行なうが、時を得ぬときには龍蛇の如く屈して世に處するべきであるのに、屈原にはそれが分からず、最後は無益にも水にとびこんで自殺してしまった、と屈原の處世をいささか非難するものである。この揚雄の說を、朱熹は手きびしく批判している。遠遊篇の注に言う。(14)

こうした義理は、揚雄には分かりっこないのだ。〔揚雄には〕ひたすら生を偸み死を惜む道だけがはっきりと見え、それをやり慣れていたのだ。そうした立場から屈原を譏るというのは、ちょうど自分が鴟梟（凶鳥）でありながら鳳凰を嘲笑するようなものだ。

更に反離騷篇の跋文では、こうした揚雄の意見や、屈原はおのれの才能をひけらかしているという班固の非難、主君の過ちを暴露したという論難などに對する洪興祖の反論をまるまる引用した後に、朱熹自身の意見を次のように書き加えている。(15)

ああ、洪氏の議論を見てみるに、屈原の心を明らかにしようとしている點では、至れり盡せりだ。しかし屈原の心が忠清潔白なものであることは、辯論をまつまでもなく、はじめから明らかだ。その行ないに過ちがないわけでないことについては、こまごまとした辯說が論じつくせるようなものでないのである。だから君子が人に對するとき、彼の行動の根本精神の純粹さを評價して、こまごまとした行ないに缺點がないわけではないことには目をつぶる。……孔子は言われた、「人の過つや、おのおの其の黨に於いてす。過ちを觀て斯に仁を知る」と。これが人を觀察する道なのである。そもそも屈原の忠は、忠を行なって過ったものであった。屈原の過ちは、忠という點での過ちであった。だから屈原を論ずる者は、彼の根本精神を論ずるだけで、その他の一切は無視して不問に付してよい。……思うに屈原の行動は過っていると

は言っても、その忠は、生を偸みなんとか終りを完うしている連中の及ぶべくもない所なのである。

朱熹はここで、忠という行爲は絶對的なもので、その結果が政治的に有效であったかどうかは問題でないと言おうとしているように見える。その絶對的な忠による行動は、「偸生幸死の者」たちの價値判斷を高く超えたものだとする。この「偸生幸死の者」という言葉が、前出の「俗人」の語の一つの脚注となるにちがいない。

このように忠を現實の有效性を超えたものとして絶對化すると同時に、恐らくそれと補完的に、現實の政治社會の中での具體的な行動が、論理による辯解を認めないといったふうに、朱熹の論斷を受けている。例えば反離騷篇に對する注釋のはしばしに、揚雄が王莽政權に協力したという事實をもってそのまま彼の言う所が信じられないことの理由づけにしようとする口吻が見える。このような、いわば〝其の人を以って其の文を廢する〟性急な論斷は、むしろ朱熹の好まぬ所であったはずである。それを敢て行なっているのは、それが揚雄への批判に止まらず、慶元退歸の際に示された、彼自身が目睹した「偸生幸死の者」「俗人」たちの處世に對する憤りにその根本の原因があったからであろう。

ちなみに、このように反離騷篇に付けられた跋や注を、「楚辭集注」製作にまつわる朱熹の心情を傳えるものとして重視しようとするのには、理由がある。すなわち反離騷篇は現在では「楚辭後語」の中に收められているが、第一章の最後に述べた、「集注」と「辯證」が組み合わされ、「後語」は別行していた段階のテキスト（これが朱熹自身の意圖によるものであった）では、「集注」「辯證」の方にこの反離騷篇が附錄されていた。[16] 朱熹自身が、「集注」の仕事を理解するために、「補注」本などのテキストにはないこの一篇を意圖的に附錄として、併せ讀まれることを望んでいたことが窺われるからである。

このように見てくるとき、いかにも平靜で判斷の公平を持しているように見える「楚辭集注」にも、いくつかの個處でその平靜さの表面をやぶって、朱熹の、現實の政治の中にある人間に對する、抑えがたい愛憎の感情が溢れ出し

ていることに氣付く。例えば「辯證」の離騒篇の部分に、洪興祖の言葉を引いたあと、次のように言う。(17)

その言葉（洪興祖の言葉）の意氣の盛んさは、儒夫をも發憤させることができる。これこそ宰相の秦檜と對立し、ついには貶死せねばならなかった理由だ。悲しいことだ。近ごろは氣風も衰退し、士大夫たちの中にこうした言を吐く者がいるのを聞かなくなった。これもまた深く危惧の念を懐かせられる所だ。

洪興祖はこんなことを言っているから秦檜の機嫌をそこねて貶死することになるのだと、朱熹は言う。もちろん彼は哀惜をこめて洪興祖の意見を取りあげているのである。朱熹が宋代の注釋家、例えば晁補之のやり方に對して神經質に反感を表明するのに對し、洪興祖に對しては、その誤りを指摘しつつも好意的であるのは、洪興祖が秦檜との對立の中で己を貫いたことに對する共感があったからのように見える。(18)ちなみに朱熹の父、朱松も秦檜と對立して不遇に終った人であった。朱熹は、揚雄に對して「其の人を以って其の文を廢した」ように、洪興祖には「其の人を以って其の注を取った」のである。人はどんなに立派な言葉を吐いてもだめだ、決定的なときにいかなる行動を取るかがその人間の全てを價値づけるのだ、という朱熹のこの時期の人間觀が、こうした言葉のはしばしに見えているようである。

王逸の注に對しても、同様の心情からする朱熹のいささか過剰な解釋をいくつか見ることができる。例えば同じく「辯證」離騒篇。(19)

舊注は「詬を撰う」という言葉を、恥辱を雪ぎ、讒佞の者を誅することだとする。これは正しくない。……こうした說を立てる者は事態のなりゆきを知らぬようだが、その志はそれなりに深く憐れむに足るものだ。

「詬を撰う」という離騒篇の一句を、讒佞の者を誅殺することだと解釋してしまう注者の心には同感できると言う。朱熹は、古い注釋者の心中にも、自分と同様に讒佞者を憎むあまり、直接關係のない語句までその方向に引きつけてしまう心情を見ようとしているのである。

この晩年の時期の朱熹が、楚辭の內容を、佞臣たちの横

行を憤りながら、それを屈折させ、悲しみをこめて表現したものだと考えて、それを彼自身の心情と重ね合わせていたこと、以下のような注の文句からも知られよう。[20]

後漢王朝の滅亡について、〔宦官や外戚といった邪佞の臣ではなく〕黨錮の賢者たちにその罪があるのだと論ずる人がいる。思うにこれは逆説的な表現を使うことによって、悲しみをより深く表現しようとしたものだ。ちょうど屈原の心情と同じである。

この章は邪佞の徒のありさまを描いて特に詳細で鋭い。讀者はこれを深く玩味すべきである。そうすれば佞人たちがどのようにして眞心ある者とまぎらわしくなるのかを知ることができる（？）。ここの言葉は、聖人孔子の言葉と正に發明しあうものなのである。

あちらはかりそめに一時の勢いを得るけれども、その惡名はいつまでも傳わる。こちらは一時の利を失うけれども、香りの高さは永遠に留まる。この兩者の違いを、志ある者ははっきりと見分け、きっぱりと決斷すべきなのである。

もし朱熹自身に、慶元退歸の事件が「楚辭集注」の撰述の直接の動機であったのかと問えば、恐らく肯定はしなかったであろう。そうしたことを製作の動機とする説明は、朱熹の好まぬ安易な「恕みの文學」の説と同類のものに結局は陷ってしまうことになるからである。たしかに楚辭の文學は彼の生涯を通じて變らぬ愛好の對象であり、屈原の孤高の生き方は朱熹の處世と根本で通い合うものを持っていた。しかしこの慶元退歸の事件を通じて、彼が人間關係に對するそれまでの見方を改めねばならなかったことが、單なる愛好といった程度を大きく越えて、楚辭に執着することになった原因であることは確實であろう。それは、道學體系の完成にいそしんでいた壯年期のものと比べて、ずっと深く、ずっとつらい人間認識であったにちがいない。そうしたとき、同樣のつらい人間認識を述べた作品として、「楚辭」が彼の前に新しい相貌で現れてきたのである。[21]

蔡沈が朱熹の臨終の様子を記した「夢奠記」に言う。

慶元庚申（六年）三月初六日辛酉、「大學」誠意章に手を入れ、詹淳に命じて謄寫させたうえ、數字を改めさせ

られた。また「楚辭」の一段を修訂された。午後に大瀉された。私は、先生にかいぞえして居間に入った。これ以後、階下の書齋に出られることができなくなった。

これより三日あと、初九日甲子の日に、朱熹は七十一歳で卒した。

朱熹がその死の直前まで「楚辭」に手を入れていたのは、第一章に述べたように輦豐の訪問を待って新しい「楚辭」の注についての指示を與えるための準備であったのかも知れない。朱熹はその生の最後まで「大學」とともに「楚辭」に改訂を加えることを止めなかった。それは、彼の晩年にあって「楚辭」がいかに重い意味を持つものであったかを端的に示している。[22] 彼の晩年のつらい人間認識と、しかし平靜さを失なわぬ強い精神とが結びついて、單に道學的な價値觀を乘り越えただけでなく、現代の我々にとってもなお多くの問題を提起する內實を持った「楚辭集注」が撰述されたのである。

注

(1) 「語類」卷一三九（正中本五二九八頁）。
古人文章、大率只是平說、而意自長。後人文章、務意多而酸澁。如離騷初無奇字、只恁說將去、自是好。楚詞平易。後人學做者、反艱深了、都不可曉。

(2) 「語類」卷一三九（正中本五二九五頁）。
字義從來曉不得、但以意看可見。如突梯滑稽只是軟熟迎逢、隨人倒、隨人起底意思。如這般文字、更無些小窒礙。想只是信口恁地說、皆自成文。

(3) 朱熹の文學思想を論じたものとして、次のような論文がある。
郭紹虞「朱子之文學批評」（文學年報四、一九三八年）未見。黃繼持「朱子文學思想述評」（華國、一九六七年）。張健『朱熹的文學批評研究』（人人文庫、一九六九年、書評：中國文學論集二、林田愼之助、一九七一年）。錢穆『朱子新學案』第五册、一九七一年。また成復旺「試論朱熹對文與道關係的看法」（前揭）。

(4) 「語類」卷八〇（正中本三三二頁）。
程先生詩傳取義太多。詩人平易、恐不如此。

(5) 橫渠云、置心平易始知詩。然橫渠解詩多不平易。
「語類」卷一三九（正中本五二九五頁）。
楚詞不甚怨君。今被諸家解得都成怨君、不成模樣。九歌是

托神以爲君、言人間隔、不可企及、如己不得親近於君之意。以此觀之、他便不是怨君。……今人解文字、不看大意、只逐句解、意却不貫。

(6)「語類」卷一三七（正中本五二三三頁）。

觀他所作離騷數篇、盡是歸依愛慕、不忍捨去懷王之意。所以拳拳反復、不能自已。何嘗有一句是罵懷王。亦不見他有褊躁之心。後來沒出氣處、不奈何、方投河殞命。而今人句句盡解做罵懷王、枉屈說了屈原。只是不曾平心看他語意、所以如此。

(7)楚辭後語三、胡笳第二十。

胡笳者蔡琰之所作也。東漢文士、有意於騷者多矣。不錄而獨取此者、以爲雖不規規於楚語、而其哀怨發中、不能自已之言、要爲賢於不病而呻吟者也。

(8)「文集」卷五三、答劉季璋（第六）。

熹衰朽杜門、無足言者。但精神昏憊、益甚於前。雖不敢廢書、然度不復能有長進矣。外事絕不敢掛口。但見朋友當此風頭、多是立脚不住。況欲望負荷此道、傳之方來、應是難準擬也。

(9)「文集」卷四四、答蔡季通（第十一）。

熹足病前日幾作、今又小定、未知竟如何。但精神日耗、血氣日衰。舊學荒蕪、有退無進。恐遂沒沒無聞而死耳。

(10)同右（第十四）。

熹自開正卽病、至今未平。今日方能把筆作書。足猶未能平步也。血氣日衰、前去光景、想亦不多。病中塊坐、又未能息心休養。才方綿動册子、便覺前人闊略病敗。欲以告人而無可告者。又不免輒起著述之念。亦是閑中大魔障、欲力去之而未能。以此極思向來承晤之樂。未知此生能復相從如往時否耳。

(11)楚辭集注序。

疾病呻吟之暇、聊據舊編、粗加檃括、定爲集注八卷。庶幾讀者得以見古人於千載之上、而死者可作、又足以知千載之下、有知我者、而不恨於來者之不聞也。嗚呼、悕矣、是豈易與俗人言哉。

(12)楚辭集注、遠遊第五「往者余弗及兮、來者吾不聞」注。

夫神仙度世之說、無是理而不可期也審矣。屈子於此乃獨眷眷而不忘者、何哉。正以往者之不可及、來者之不得聞、而欲久生以俟之耳。然往者之不可及、則已末如之何矣。獨來者之不得聞、則夫世之惠迪而未吉、從逆而未凶者、吾皆不得以須其反復熟爛而睹夫天定勝人之所極。是則安能使人不爲沒世無涯之悲恨。此屈子所以願少須臾無死而僥倖萬一於神仙度世之不可期也。嗚呼、遠矣。是豈易與俗人言哉。

(13)「豈に俗人と言るに易からんや」と朱熹が言うとき、彼は司馬遷の「任少卿に報ずる書」に見える「此れ智者の爲に言う可きも、俗人の爲に言うは難きなり」の一句を頭に置いていたにちがいない。司馬遷のこの言葉は、周易・春秋・離騷などを擧げていわゆる發憤著書の說を展開したすぐあとに、自らの史記著述に關係して吐かれる。このことも、楚辭は〝怨

みの文學〃ではないという朱熹の主張が、司馬遷の說それ自體を攻擊の對象としていなかったことの一つの傍證となろう。

(14) 楚辭後語、反離騷第十六注。

此等義理、雄皆不足以知之。唯有儁生惜死一路、則見之明而行之熟耳。以此譏原、是以鴟梟而笑鳳皇也。

(15) 同右、跋。

嗚呼、余觀洪氏之論、其所以發屈原之心者至矣。然屈原之心、其爲忠清絜白、固無待於辯論而自顯。若其爲行之不能無過、則亦非區區辯說所能全也。故君子之於人也、取其大節之純全、而略其細行之不能無弊。……孔子曰、人之過也、各於其黨、觀過斯知仁矣。此觀人之法也。夫屈原之忠、忠而過者也。屈原之過、過於忠者也。故論原者、論其大節、則其它可以一切置之而不問。……蓋原之所爲雖過、而其忠終非世間儁世幸死者所可及。

(16) 辯證上、目錄。

若揚雄則尤刻意於楚學者。然其反騷、實乃屈子之罪人也。洪氏譏之、當矣。舊錄既不之取、今亦不欲特收。姑別定爲一篇、使居八卷之外、而并著洪說於其後。蓋古今同異之說、皆聚於此、亦得因以明之。庶幾紛紛或小定云。

(17) 辯證上、離騷經。

其言偉然、可立儒夫之氣。此所以忤檜相而卒貶死也。可悲也哉。近歲以來、風俗頹壞、士大夫間、遂不復聞有道此等語者。此又深可畏云。

朱熹「楚辭集注」攷（小南）

(18) 洪興祖の政治的な立場については、桑山龍平「洪興祖と楚辭補注」（天理大學學報十九、一九五五年）を參照。

(19) 辯證上、離騷經。

舊注以攘詬爲除去恥辱、詆讒佞之人、非也。……爲此說者、雖若不識事勢、然其志亦深可憐云。

(20) 楚辭集注

東漢之亡、議者以爲黨錮諸賢之罪。蓋反其詞、以深悲之。正屈原之意也（離騷「莫好脩之害也」注）。

此章形容邪佞之態、最爲精切。讀者宜深味之、則知佞人之所以殆。又信此語與孔聖之言、實相發明也（九章、哀郢注）。

彼雖苟得一時之勢、而惡名不滅。此雖失其一時之利、而芬芳久存。二者之間、正有志者所當明辯而勇決也（離騷「芬至今猶未沫」注）。

(21) 蔡沈「夢奠記」（王懋竑「朱子年譜」卷四の引用に依る）。

慶元庚申三月初六日辛酉、改大學誠意章、令詹淳謄寫、又改數字。又修楚辭一段。午後大瀉。隨入宅室。自是不復能出樓下書院矣。

(22) この論文では、「楚辭集注」の製作を〃慶元退歸〃の事件と少し直接的に結びつけすぎたかも知れない。最晩年の朱熹には、道學に專念していた時期とはちがった、はば廣い關心と深い視點とがある。より大局的には、この朱熹の最晩年の世界を全體的に捉え、その上でその世界の中での「楚辭」の位置を追求する必要があろう。

＊　この論文は、田中謙二教授を班長とする、京都大學人文科學研究所、朱子研究班の報告論文として準備された。拙論を叮嚀に讀んで御意見をお聞かせ下さった田中教授に、感謝の微意を表したい。